



極樂浄土

見聞記

フエフキガエル

## 極楽浄土見聞記

### 1

まず初めに断っておかなければならないのは、私が少し変わった頭脳をしているということだ。たとえば、普通の人ならどうでもいいようなことにひどく神経を使い、また人に何かを説明しなければならぬときに、相手がおそらく分かっているだろうと思うと、説明を省く癖があった。そのために誤解を招くこともあり、誤解を招く程度なら、それでもいいのだが、相手を傷つけてしまうこともあった。しかもそれが精神と肉体と両方であったことで、私はひどく落ち込んで、一時は外出不能となった。そのことをここで詳しく述べるつもりはないが、簡単に説明しようと思う。でなければ、私がなぜ四国の山寺に行くことになったのか、そして、そこで遭遇した奇妙な事柄を理解できないことと思うから。

### 2

私は、ある町工場で働いていた。そこは従業員が十数人程度の小さなプレス工場で、自動車部品などの下請けだった。私はそこで、一日中プレス機の前に立ち、ぽっかり空いた金型に金属板を差し入れ、上からの圧力で成形された金属板を再び取り出して鉄籠などに収納するといった単純だが根気のいる作業をしていた。しかし、作業中はめったに人と会話をしないので、人としゃべるのが苦手な私の性格には合っていた。また、工場に勤めていた人も朴訥な人が多かった。

さて、五月に、工場長の知り合いという十九歳の若者が、アルバイトで働きに来た。彼は今風のお洒落な雰囲気、ギターが趣味だった。将来はギターで生活したいと言っていたが、休み時間や昼食後に、よくギターを弾いて他の従業員を楽しませていた。工場に一人いる事務員の若い女性は、それまで比較的私に好意を持ってくれていたのだが、ギターの若者が来てからというもの、私には素っ気なく接するようになっていた。工場長の知り合いだということもあるだろうが、ギターの若者は従業員のみならずちやほやされていた。

私は年齢も近かったので、といっても五歳は離れているのだが、工場長から彼の仕事を見てやってくれと頼まれた。

プレス機は、違った種類がいくつもあり、作業方法も違っていた。

因みに昔のプレス機と最近のプレス機との一番の違いは性能よりも安全装置の数にあると思う。最近のプレス機では、滅多に事故は起きない。安全装置が二つ以上あるからだ。しかし、慣れてくるとこの安全装置が鬱陶しくて仕方なくなる。さっささっさと作業ができないからだ。



それで安全装置を消して、作業を速くしたりするのだが、というのも決められた数をこなせば、定時に家に帰れるからだ。もっとも残業手当が目当てでゆっくりやる人も中にはいるが、私は早く帰る方がよかった。

そのプレス機は少し古い型のものだった。やり方を説明したあと、私は安全装置は一つしかないから、気をつけて作業するようにギターの彼に言った。安全装置が機能しているかどうかは、赤いランプが点っているかどうかで分かった。で私は、彼がその赤いランプを確認したように思った。だから私は、あえてランプが消えていることを言わなかった。悪気があったわけではない。これが私の性格なのだ。しかし、それによって、彼は右手の指数本を失うことになり、ギターが弾けなくなったのだ。そのときのことを私は詳しく書く気はない。あまりにも悲惨だったから、とても思い出す気が起きないのだ。

そのあと、私はみんなから疎まれる存在となった。工場長からは、当然恨まれた。私がちゃんと説明しなかったから、事故が起きたのだと、工場長もみんなもそう思ったのだ。従業員の中には、ギター弾きの彼が事務員の女性から好意を持たれているのを私が妬んで、わざと説明を省いたのではないかと疑う人もいた。また反対に、私をかばってくれる人もいることはいたが、工場長に嫌われている私を強く擁護することはできないのだ。私は、工場に居づらくなった。それで辞めることを社長に言った。社長は一応引き止めた。しかし、内心はそれを願っていたのだろう。長年の功績を考えれば、工場長の方が私よりはるかに重要であり、また工場の沈んだ空気を一新したい気持ちがあったのだろう。

「いつでも戻ってくればいいから」と社長は、お義理に言ってくれた。

### 3

それから一ヶ月私は何もする元気がなく、自分のアパートに引きこもっていた。次の働き口を探さなければならないのだが、その気にもなれず、今まで貯めたお金で、どこか気晴らしに旅に出ようかとも考えた。

ある日曜日の午後、工場で私より歳が少し上のSという男が、突然私のアパートを訪ねて来た。部屋のドアを開けたとき、そこにSが立っていたので私は驚いた。というのは、Sとはめったに会話をしたことがなかったからだ。しかもSは工場長と仲が良く、今回の件も私に責任があると言っていたのだ。そのSが手土産を持ってやって来たので、私はどういう了見なのだろう、とまず不審に思った。

Sはなぜか微笑みながら、「工場長に頼まれて、来たんだけどね」と言った。「あれから工場長は、君に対して冷たくあたったことを後悔しているんだよ。で、俺に、君が今どういう風に暮らしているか見て来てほしいと言うのだ。落ち込んでいるのじゃないかと心配して。それで、ちょっと話をしようと思って来たのだが——」

「部屋が散らかっているんで、近くの公園で話をしませんか？」と私は言った。

私はSを部屋に入れたくなかった。部屋が散らかっていることは事実だが、自分の領域に好きでもない人間を入れたくなかったのだ。

「ああ、それでもいい。じゃあこれを受け取ってくれ」とSは饅頭か何かの手土産を私に渡した。

百メートルほど離れたところに小さな公園があって、そのベンチで私たちは話をすることにした。そばの自動販売機で、私は缶コーヒーを二つ買い、一つをSに手渡した。

ベンチに腰を下ろすと、Sはすぐに言った。「君は知っているかどうか知らないけど、あのギター弾きはこの前、自殺したらしいんだよ。ギターが弾けなくなって、将来を悲観したのだろう」

私は背筋がぞくっと寒くなった。なぜわざわざそんなことを言いに来たのかと、私はSの横顔を見た。

Sは続けて言った。

「俺たちはあのとき、君のせいで彼が事故を起こしたと責めたけれども、よく考えれば、彼自身も注意が足りなかったと思う」

このときSは私の顔を見て、どういう反応をしているか確認したが、私が無表情で黙っているの、少し物足りないようだった。私は、どう答えていいか分からなかったのだ。私は責任を取って工場をやめた。その私に今更どうしろというのだ。確かに彼が事故をしたのは、私の説明が不十分だったせいもあるだろう。しかし、安全装置は一つしかないから注意するように言ったのだ。普通に注意して作業をしていれば、たとえ安全装置が切れていても事故にはならない。実際、昔のプレス機に安全装置などなかったのだから。

私が黙っているの、Sは仕方なく自分から口を開いた。

「ところで君は、今何をしているんだい？どこか勤めに行っているのかい？」

これには黙っているわけにもいかなかった。

「いや、何もしていない。ずっと部屋の中にいるよ」と答えると、

「そりゃーいけないね。君のような若い者がそんな暮らしをしていたのでは、ろくなことはないよ。体も弱くなってしまふからな」

私はSが、わりとまともなことを言ったので、意外に思った。ひょっとすると、私を工場に戻らせたいのかと思ったが、そうではなかった。

「外に出て運動でもやらないと、体がなまって、次の職場で苦労するぜ」

「旅行しようと思っているんだ」と私は言った。しかし、すぐに「四国のお遍路でもしようかと思う。彼の供養のために」と言い直した。

それは咄嗟に思いついたことだったが、しかし満更悪くはない計画だった。実際、四国はここからそう遠くはなかったし、一度回ってみたいと思っていたのだ。

するとSは、薄気味の悪い微笑を浮かべて、「で、それはいつ行くつもりだい？」と聞いた。

「準備を整えなければならないから、一週間以上先になると思う」

と言うと、Sはこう言った。

「札所巡りもいいが、しかし、それは単なる旅行のようなものだぜ。本当に彼の供養を考えるのなら、一つの寺でしばらく修行してみたらどうだい。じつは工場長から、君が今何もせず、ギター弾きのことで悩んでいるのなら、この話を勧めてみてくれと頼まれたのだが——」

と言ってSは、ポケットから封筒を取り出して、それを私に手渡した。開けて中の手紙を読んでくれ、と言ったので、私はそのようにした。工場長の癖のある字で、次のように書かれていた。——前略、この前のことで君に対して、大変つらくあたったことを、私は後悔している。君が工場を辞めてから、君は一人で悩んでいるんじゃないだろうか、私は心配しているのだ。で、もしもまだ就職が見つからず、部屋にいるのなら、どうだろう。この一夏ある寺で過ごしてみてもどうだろうか。きっと素晴らしい経験になると思う。その寺は四国の山の中にあるのだが、私の知り合いが和尚をしているのだ。ちょっと変わった和尚だが、怒るような人ではないから、気楽に過ごせると思う。君がその気なら、私が頼んであげよう。ひょっと君は坊主頭にしなければならないのかと心配するかもしれないが、その心配はいらないよ。その寺は、禅寺で、一般の人も参加できるのだ。専門の坊さんなるわけではなく、しかも、一夏だけだから、いちいち坊主頭にする必要はない。それと費用のことだが、君のような若者からは、一切金を受け取らない。変わっているだろう。だから遊び半分で行ったらいい。嫌になって、途中で帰って

も誰も文句は言わない。そこが禅寺の自由なところだ。君がその気になれば、次の連絡先に電話してくれ。と電話番号が書いてあった。

読み終わったとき、Sはやはり気色の悪い笑顔で、「どうだ、行ってみる気はないかい？」と聞いた。

「面白そうなところですね」と私は言った。

「だろう。俺も仕事があれば行ってみたいと思う。禅寺といっても、それほど厳しくはないようだし、いい経験になるだろうな。ま、ギター弾きの供養のために行くと言えば、工場長も喜ぶだろうし——よく考えて決めることだな。じゃあ俺は、これで帰るから」

とSは、任務が終わって清々したように立ち上がり、去っていった。

#### 4

私はどこか胡散臭いところがあると思いながら、工場長が勧める四国の山寺に行ってみようと考えた。確かにそれはいい経験になるだろう。

私は手紙にあった携帯の電話番号に電話した。その電話番号は多分工場長のものだろうと私は思っていたが、とても若々しい女性の声が返ってきた。

「その件につきましては、すでに工場長からお聞きしています。その寺に行く道順などを書いた手紙を、そちらにお届けしますから、しばらくお待ちください」

私はなんとなく心が沸き立つのを覚えた。

二、三日して手紙が届いた。寺の簡単な地図と電車・バスの乗降場、時間表そして持っていくものなどが書いてあった。工場長の名前を言えば、寺は無条件で泊めてくれるという。滞在期間は自由だが、できれば一ヶ月は、少なくともその寺で過ごしてほしい。でないと、せっかく和尚に頼んだ甲斐がなく、和尚もがっかりするだろうから、と。

#### 5

私はリュックサックにジャージなどの着替えの服を入れて、その山寺に向かった。七月の晴れた日である。早朝に部屋を出たのだが、交通機関が希薄なこともあり、その山寺の麓に到着したのは、すでに夕刻となっていた。が、夏のことだから、全然暗くはない。私は手紙に書いてあった地図を頼りに、バスの通る道から細い道を歩き、そして傾斜の緩い坂道を上っていった。辺りは民家もなく、やがて道も舗装道から砂利道になり、しまいには草の生えた自然の山道となっていた。

樹木が生い茂っていたが、片側が谷になっていたの、さほど暗くはなかった。しかし、それも最初のうちで、やがて懐中電灯が必要となった。懐中電灯は手紙にも、持っていくものとして書いてあったが、このときのためなのだろう。

周りに目印となるものはとくに無く、谷に沿って上っていただけだが、その谷とも離れて、いよいよ山の中に入り込んだときの心細さは例えようがなかった。本当に寺があるのかと、心配になった。やがて前方に小さく明かりが見えたときは、私は思わず涙が出た。歩く足にも力が湧いてきた。

山寺に到着したときは、もうすっかり暗くなっていた。夜空を見上げると星が満天に煌めいていた。暗くて寺の全体をよく見ることはできないが、禅寺らしく質素な感じがした。山門というのがあったかどうか気づかなかったが、玄関の軒に提灯がぶら下がっていて、ロウソクの炎がゆらめいていた。明かりはこれと、建物の隙間からこぼれてくるわずかなものだった。

私は玄関の戸をとんとん叩いて、「ごめんください」と言った。

私は、この日この寺に来るということを電話の女性に知らせていたので、それで提灯に明かりが点っていたのかもしれないが、まもなくして戸が開いた。

私と年齢があまり変わらない青年が現れた。作務衣を着ていて、坊主頭で体格も良かった。私を見ると「さあ、中に入って——」と言った。私は名前を言う暇もなく、取り敢えず「お世話になります」と言って中に入った。

禅寺ということで、この建物は僧堂に相当するのだろう。八畳くらいの板敷の間に、私は丸い鍋敷きのようなものに座らせられた。山奥のせいか電気は来ていないようで、部屋の隅にあるランタンの明かりだけが頼りだった。

薄暗い中で、青年僧は私にこの寺で暮らすにあたり、留意点をいくつか説明した。朝何時に起きるとか、どのような修行をするとか。しかし、おかしなことに青年僧は、一度も私の名前を聞こうとしないのだ。

「あのう、あなたのことをどうお呼びしたらいいのでしょうか？」

と私は聞いた。

「そもさん。と言えよ。名前など、ここでは通用しない。ここは俗世間とは掛け離れた場所なのだ。なので、君のことをそなたとかそちとか呼ぶが、会話は御法度となっている。必要最低限のことしかしゃべらない。会話をする暇があれば、座禅をしろということだ。それが嫌なら早々に退散すること」

「失礼ですが、もう長いことこの寺で修行をされているのですか？」

と私は聞いた。頭を丸めているので、一般の参禅者ではないと思ったのだ。



「だから、そういう話はしない決まりなのだ」と青年僧は答えた。「この寺では、自分以外の者は存在しない。自分の世界がすべてなのだ。普通の寺のように思っているはいけないよ。非思量底を思量せよ、という言葉は君は知らないかい。この寺は非思量底なのだ。その非思量底を思量することが、この寺での修行なのだ」

私は、青年僧の言うことがさっぱり分からなかった。しかし、禅というものが、そもそも分かり難いものであり、私はそういう分かり難いものに昔から惹かれるところがあった。また、 unnecessary な会話の御法度は、私の望むところだった。プレス工場で働いた理由も、人としゃべるのが苦手だったからだ。

それで私は、この寺には何人いるのか、また和尚は今どこにいるのか、寺にいるのなら、なぜ私に会いに来ないのか、など聞きたいことがたくさんあったのだが、聞かないことにした。どうせ和尚はすでに私のことを知っているはずだし、会う必要もないのだろう。だが、いったいどんな和尚なのだろう、と私は想像したりした。

お恥ずかしいことに、このとき私のお腹がぐるぐる鳴った。空腹だったのだ。しかし、もう夜の九時に近かったので、明日の朝まで我慢するしかない、とっていると「何か食べてきたか？」と青年僧が聞いた。

「いえ、昼から何も食べていません」と答えると、青年僧は「残り飯があるから、持って来てあげよう」と部屋を出た。私のために取っておいてくれたのだろうか。

やがて青年僧は、玄米に麦が混じったご飯とトマトの輪切り、それと漬物と水の入ったコップをお盆に載せて戻って来た。

「禅寺の食事は、いつもこんなものだから期待するなよ。三食食べられるだけ幸せだと思え」

私は、その質素な食事が、とても美味しく感じた。もちろん空腹だったせいもあるが、山で食べる弁当はうまい、ということなのだろう。

ところで私は、自分の性格からいって、初めて会う人間や場所に対してすぐに緊張する質なのだが、しかし、この寺ではなぜかそうならなかった。まるで自分の部屋にいるようにくつろいでいるのだ。厳しいイメージがある禅寺に来ているというのに。もちろん、今後どのような修行が待ち構えているのか分からないが、一つ言えることは、ここに来てから私はすごく呼吸が楽なのだ。例えで言えば、水を得た魚のように。

食後、青年僧は、ご飯を盛る丸い器と箸は自分で洗うように言った。それは私専用の食器ということで、自分の部屋にしまい、食事のたびに食堂へ持って行かなければならないらしい。

私は食堂で食器を洗い、それから青年僧にこれから私が約一月寝起きをする部屋を案内された。そこも板敷で六畳ほどの広さがあった。私はその隅にリュックサックと先ほど洗った丸い器・箸を置いた。因みに先ほど行った食堂には、座って食べる木のテーブルがあり、かなり広いスペースだったので、なぜわざわざ自分の部屋に食器を置くのかと不思議に思った。が、よく考えれば禅寺では、食べることが最も大切な修行なのだ。ご飯を盛る丸い器を持って歩くときは、顔の近くまで両手で掲げて、恭しく扱う。部屋に置くときは、埃が被らないように手ぬぐいで覆う。今まで何とも思わなかった食べることに敬意を表することが、ここでの暮らしの基本となるのだ。

部屋の隅にランタンが置かれていた。建物全体が暗いので、他の場所へ移動するときは、このランタンか、あるいは懐中電灯を携帯しなければならなかった。あの手紙にも懐中電灯及び電池の予備を忘れないようにと書いてあったが、なるほど電気のない寺では、懐中電灯は何よりも必要なものに違いない。

ランタンは、菜種油で自家製だという。それを聞いてこの寺は、自給自足の生活をしているのかと思ったが、米や麦はこの山中では難しいだろうから、半自給自足なのだろう。それにしても一年間分の菜種油を作るには、相当な量が必要だろう。この山中にそんな広い畑があるのだろうかとは私は不思議に思った。寺の敷地で野菜を作るというのはよくあることで、ましてや禅寺ともなればそれが重要な行となる。

坊主頭の青年僧は、押し入れを指差して、「布団はあの中に入っている」と言った。

そして、布団の敷き方から寝方まで教えてくれた。夏と言っても、ここは山寺だから朝方は冷えるようで、そういうときは掛け布団を体に巻きつけて寝ろと言うのだ。夏でこの状態なら、冬はどうするのだろうかと思ったが、冬までいないので聞くことは控えた。

質素であることは、いかにも禅寺らしい。柱時計も置時計もここには見当たらなかった。そればかりか、私が腕にしていた時計でさえ、青年僧は奪うようにして取り去ったのだ。

「この腕時計はそなたが、この寺を去るときまで預かっておく」

これにはさすがの私も反論しないではいられなかった。

「それがないと今何時で、朝なのか昼なのか分からなくなります……」

「分かる必要はない」と青年僧はきっぱりと答えた。「必要なときに魚板を叩く。それが時計の代わりだ」

囚われないのが禅だと聞いたことがあるが、時間でさえ囚われない、ということなのか。

それにしても、なんて静かな寺なんだろう。まったく音がしないのだ。他の参禅者は、みんな眠りにについているのだろうか。しかし、就寝するには、まだ早すぎるようにも思うが、そのことを尋ねる勇気も私にはなかった。

青年僧は言った。「ここの暮らしは、俗世間とはまったく違う。ピュアな暮らしだ。単純だが透き通っている。半年も経てば、何でもないことが、とてもありがたく感じるようになる」

「半年も多分いないと思いますが——」と私が言うと、青年僧は微笑を浮かべて、「せいぜい楽しむことだな。座禅も随意で、気の向いたときにすればいい。こちらは何も言わないから。座禅の仕方は、教えるまでもないが、足を組んで両手をこのように重ねる。大事なのは背筋を伸ばすこと、そして、何も考えないことだ」

「公案というのはないのですか？」

「ない。そういう宗派ではない。何も考えない。また時間も決まりはない。座禅は確かに足が痛くなるが、我慢してまでする必要はない。安易なようだが、あらゆる苦しみから解放されてこそ禅なのだ。それよりも重要なのは作務である。作務とは寺での作業全般を言うのだが、とくに畑仕事をこの寺では重要視している」

「この山の中に畑があるのですか？」

「ある。この山の裏側に盆地のようなところがある。そこに野菜や菜の花を植えている。かなり広い農地だから、一日中畑仕事に追われて、座禅どころではない。もっとも、これは強制ではない。しかし、無心になることが禅なので、農作業ほど禅の要素を備えているものはない」

「もちろん、手伝いますよ」

すると、青年僧は微笑んで、「それは大いに助かる。真夏に向かって、人手が足りなくて困っていたところだ。で、先に断っておくが、食事は自分で作ること。これがこの寺の決まりだ。

オカズになる材料は野菜以外にほとんどないのだが、何でも好きなものを作っただけ。ご飯だけはこちらで作っておく。因みにこの寺は、電気はないが、プロパンガスはある。昔はプロパンガスさえなかったようだが、和尚のツテでプロパンガスは使えるようになった。だからそれで味噌汁を作ったりできる。やり方は明日の朝教える。またご飯はガスの炊飯器だから保温が効かない。それで冬場は冷たくなったご飯に味噌汁をぶっかけて食べる、わたしはね」

私はこのとき、あの細い山道を思い出した。

「業者は車でプロパンガスを運ぶのですか？」と聞いた。

「途中まで車だが、そこから台車に載せて運んでくる。大変だ、坂道でしかも凸凹道だから。長くて大きいプロパンは、とても運べない。小さいプロパンを二つ台車に載せてやって来る。月に一度」

「電話をして持って来てもらうのですか？」

「いや、電話はここにはない。和尚は携帯を持っているようだが、プロパン屋は定期的に持って来るようにしているのだ」

「じゃあプロパンガスがなくなったときは、どうするんですか？」

「予備のプロパンがあるし、仮にそれが空になっても、薪がある。竈もある。手間はかかるがご飯は炊ける。風呂も五右衛門風呂だからガスはいらない。要するに煮物や味噌汁を作るときに、ガスコンロを使うのだ。これだって七輪を使えばガスはいらないのだが、夏場の暑いときに一日中七輪を使うわけにもいかない。じつはプロパン屋と和尚は、昔からの知り合いで、その縁でプロパンガスの契約をしているのだが、正直言ってこんな山の中にプロパンを運ぶのは、時間的にも損だと思う。体力的にもきついだろうし、まあ今はその息子が持って来ているのだが」

私は和尚の話が出てきたので、このチャンスにと聞いてみた。

「ところで和尚さんは、今このお寺におられるのですか？」

「おられる。じつに変わった和尚だ。めったに私たちの前に現れない。食事さえ、自分で作っておられる。じつはこの建物の裏にもう一つ小屋があって、そこにいつも一人で暮らしておられる。だから、プロパンガスの一個はその小屋に置かれている」

私は言った。

「このお寺にしばらくお世話になるので、挨拶をしておきたいのですが……」

「その必要はない」と青年僧はきっぱりと答えた。「和尚はすでに今日そなたが来ることを知っている。私は和尚から、代わりにそなたの面倒を見るように言われているのだ。何度も言うが、和尚はじつに変わったお方で、人間嫌いなのだ」

人間嫌いな和尚というのを、私は初めて聞いたように思う。お寺の和尚は、講話好きで、一般の人に説教を垂れるイメージが私にはあるのだが、ここの和尚は違うのだろうか。私は勢いづいて、「では現在このお寺には、何名暮らしているのですか？」と聞いた。

「それは言う必要はない」と青年僧は言った。「何人いようが、そなたにとっては、影のようなものだ。話しかけても答える者はいない。もっとも、わたしと和尚は別だが……」

青年僧は立ち上がって、押入れを開けた。私との会話を避けるためだろうか。

「布団は敷きっぱなしにしてはいけないよ。ときどき乾燥のために陽のあたるところに干すのはかまわないが。それと洗濯物は裏の物干し台を使えばいい。洗濯機はないから、井戸の水をタライに汲んで自分で洗うんだ。洗剤もないが、乾けば一緒だ。さて、雪隠のある場所もすでに教えたから、今日はもう暗いし、建物の説明は明日の朝にしよう。それと風呂は三日に一度だから。畑仕事で汗をかいたら、近くの川で水浴びをして帰ればいい。そしてこれが大事なことだが、分からないことがあれば、わたしに聞くこと。雑談はしないが、教えることはわたしの務めだから」

青年僧が部屋を去ったあと、私は布団を敷いた。旅の疲れですぐに眠った。ランタンの明かりはついたままだが、この使い方も聞く必要があるだろう。

## 6

翌朝、私は魚板を叩く音で起こされた。私はジャージ姿で部屋を出た。この部屋には戸がなかった。というかこの僧堂は木造の二階建てで、玄関と勝手口以外、戸がなかった。もっとも私はまだ二階は見ていないので分からないが、一階は六畳ほどの広さの部屋がいくつもありながら戸がなく、そしてどこも空っぽのようだった。

雪隠のそばのポンプで顔を洗い、食堂に行くと、昨夜の青年僧が私に言った。

「朝の座禅をするから座禅堂を案内しよう」

で私は青年僧のあとについて玄関の外に出た。ちょっと行ったところに小屋があった。それが座禅堂で、簡素な造りだった。座禅のとき尻に敷くクッションが数個置かれていた。

青年僧がまず手本を見せてくれた。

「何時間座禅をしろという決まりはない。禅寺によっては長い線香が燃え尽きるまでというのがあるようだが、ここではそういうことはしない。囚われないのが禅なのだ。足が痛くなったら食堂に戻って自分の食事を作ればいい」

私は見よう見まねで座禅をした。無念無想と青年僧は言ったが、考えることが多かった。第一に、朝の明るい日差しの中で見た限りでは、この寺には本堂と呼べるような建物がなかった。本堂のない寺を寺と言っていいのだろうか。僧堂がなくても本堂は絶対必要なのではないだろうか。そのことを私はあとで青年僧に聞こうと思った。これは雑談にはならないだろう。青年僧は、分からないことは自分に聞け、と言ったのだし。

で、私は食堂に戻ったときに、青年僧に聞いた。青年僧は頷いてこう答えた。「昔、この寺にもちゃんとした本堂があった。座禅堂がある場所に建っていたのだ。しかし火事にあって焼失してしまった。本来なら檀家から寄付を募ってまた新しい本堂を建てる場所なのだが、この寺に檀家がいると思うかい。大昔はそれでもこの寺を維持する程度には檀家がいたようだが、今は一軒もない。だいたい本堂がない寺など誰も寄り付きはしないだろう。廃寺になるところを、いやすでに廃寺なのだが、和尚が買い取ったのだ」

「買い取った！？」私は意外な言葉に聞き返した。「買い取ったとはどういうことですか？」

「和尚はもともと坊さんではなく、高知の方の料亭の若旦那だった。禅にかぶれて若い頃からこの寺で参禅をしていたのだ。ところが、その頃にある事件があって本堂が火事になった。もともと貧乏寺だから、本堂を建てる財力がない。檀家も去っていった。そこで和尚がこの寺の権利を買い取ったのだ。しかし、未だに本堂を建てる気はないらしく、和尚の考えでは本堂がなくても、禅の修行はできるというのだ。この周辺の山全体が本堂だと和尚は考えているのだ。だから普通の禅寺では、本堂で朝の勤行があったりするのだが、ここにはない。経典すら置いていない。——坐禅、日常の行い、それがすべてなのだ」

青年僧の話聞いて、私は不審に思ったことがある。それは、和尚はもともと俗世間の人だと言うが、であれば、その火事の際の和尚はどこへ行ったのか。また火事があったと言うが、その火事の前に、ある事件があったと青年僧は言った。その事件とは何なのか。

それを聞こうとすると青年僧が、「さあ早く朝飯の準備をしてくれ。畑仕事を手伝ってくれるのなら、午前中の涼しい時間帯にやりたいからな」と言った。

それで私は聞くことを断念した。

ところでこの食堂は、もともと土間だったようで、その上に板（すのこ）を置いていた。だから素足のまま出入りすることができたが、青年僧が言ったように竈もあり、人数が多い時はこの竈を使うらしいが、普段はガス炊飯器を使用していた。すでにご飯は炊けていた。あとはオカズを作るだけだが、その材料は野菜に限られていた。肉食を禁じているのか、獣の肉は一切なかった。もっとも、仮にあったとしても冷蔵庫がないから日持ちはしないだろう。ただ保存の効く魚の甘露煮はあった。多分近くの川の小魚を甘露煮にしたのではないかと思う。これがこの寺の一番の贅沢品と言えた。あとは漬物があるのみで、味噌汁を作る味噌は樽に入っていた。私は取り敢えず、片手鍋で味噌汁を作った。ダシはなかったが赤味噌なので味は十分にあった。ご飯は昨夜と同じで、玄米に麦が混じっていたが、これはオカズが少ないので、ご飯自体で栄養を摂取するつもりなのだろう。野菜に関しては、今が旬だからトマトやキュウリ、レタス・ナスビなど新鮮なものがたくさんあった。サラダにするには最適だが、三度三度同じ内容では飽きてくる。といって私に、これといってできる料理はなかった。今の季節はまだ野菜が豊富にあるからいいが、冬になるとどうなるのだろうか、と私は心配になった。もっとも、私は冬までここに居る考えはない。リセットのつもりでここに来たのだ。一ヶ月ほどここにいて、あの忌々しい事件をきれいさっぱりと忘れ去り、また新しい人生を始めるつもりなのだ。

それにしても、あの工場長はどういう風の吹き回しで、私にこの寺を勧めたのだろうか。あれほど私のことを嫌っていたのに。またあの電話に出た若い女性は、いったい何者なのだろうか。と私の想念は、ここに来て次から次と駆け巡った。特にあの若い女性のことが気になった。工場長から話を聞いていると言ったが、工場で働いていた女性の声ではなかった。ひょっとすると工場長の家族かもしれないが、自分の親を工場長と呼ぶだろうか。それも違うように思う。

謎の多いことだが、この寺自体謎の闇に包まれていると言っていい。話によると和尚は人間嫌いで禅に没頭しているという。食堂の窓の向こうに小屋があるのだが、それが和尚の住まいなのだろう。

和尚は、かつては料亭の若旦那だった。いや、今もそうなのかもしれない。であれば、出家はしていないのだろう。この寺はすでに廃寺となっているので、檀家がいなければ、出家しようとうとうとうと文句を言う人間はいないのだ。参禅者が寺に来たいと言えば拒むことはない。ちょうどいい寺の作業員になる。若者は無料だというのも、タダで働いてくれるからだろう。

7

青年僧は私に麦わら帽子とゴム手、それとタオルと長靴を貸してくれた。農作業をするためだ。

そうして青年僧は、収穫に使う籠や草を刈る鎌や肥料などを一輪車に積むと、「じゃあわたしのあとについて来て」と言って、先に一輪車を押して向こうに歩いた。で、私はそのあとについて行った。

谷になっているところがあり、その谷を通り向けたところに小さな盆地があった。その盆地に足を踏み入れたとたん、私は驚いた。月並みな表現だが、別世界のようなようだった。草花が咲き乱れ蝶が飛び交っていた。そして、この楽園のような盆地に畑が作られていた。トマト、ナスビ、キュウリ、それにカボチャやマクワウリなど多種多様な野菜が育てられていた。

青年僧が、「そなたには草刈をしてもらおう」

と、鎌を一丁私に手渡した。

「喉が渴いたら、トマトを齧ったらいい。小玉西瓜も熟れていれば、それを割って食べればいい」

なるほど西瓜も植えられていたが、熟れるにはもう少し日数がかかるようだった。

雑草はうんざりするほど茂っていた。しかし畑の周りだけ刈ればいいということだった。この時期の草はじつに生育がいい。刈っても十日で元の状態になるらしい。雑草の海の中に畑があり、人間がよく歩くところは道ができていた。向こうの方に川があるようだった。シロサギがそこから小魚を啜って飛び立った。そして、その近くになぜか板塀で仕切られた空間があった。けっこう広いスペースで、中がどうなっているのか気になった。探せば節穴ぐらいあるだろう。帰りに川で水浴びをして、そのついでに、あの囲いの中がどうなっているのか確かめてみよう、と私は決心した。

太陽が上昇してくると、顔から汗が流れるようになり、私は首に垂らしたタオルで汗を拭き拭き草刈をした。

昼前（腕時計をしていないので何時かは定かではないが）青年僧が、「飯を食いに帰ろう」と言った。そこで私は「ちょっと川で水浴びをして帰りますので、そもさんは先に帰っててください」と言うと、「じゃあそうするが、あまり遅くならないように」と言った。さらにあの板塀の方を指差して、「くれぐれもあの囲いには近づかないようにな。あれは和尚の隠れ家だから、もしも中を見ようとして見つかったらすぐに寺を追い出されることになるぞ。今までに何人もそうやって寺を追い出されたのだ」と言った。

私はいっそう興味が湧いてきた。和尚の隠れ家だと言うが、高さ二メートルほどの板塀で囲まれているだけで、建物らしきものはないのだ。これを隠れ家というのは無理があるように私は思った。

「では現在あの囲いの中に、和尚はおられるのですか？」と私は聞いた。

「それは分からない」と青年僧は答えた。「和尚の暮らしぶりは謎だ。未だにわたしはよく知らないのだ。神出鬼没という言葉があるが、まさにそれ。思いがけないところで和尚と出会うことがある」

「たとえば、どういうところですか？」

「そうだな、わたしはたまに用事があって、高知の街に出ることがあるのだが、その街のある通りでばったり和尚と出くわすことがある。少ない機会に何度も会うということは、和尚はしょっちゅう街に下りているということだろう。もともと和尚はその街の住人だから、いてもおかしくはないが、朝は寺にいて昼は街にいる、車もない寺からけっこう時間もかかるし、いつの間に来られたのだろうと、不思議に思うことはある。それだけでなく、この山近辺で、しょっちゅう和尚を見かけるのだ。山が本堂の代わりだと日頃から言っているから、おそらく行をしているのだと思うが、とにかく不可思議な和尚だ。そこが和尚の魅力でもあるがね。じゃあわたしは先に帰っているから」

と言って青年僧は、熟れたトマトやナスビが入った籠を一輪車に積んで、戻って行った。

私は川の方に向かって歩いた。近づいて見ると、その川幅は一メートル半ほどで、水の量はそれほど多くはないが、きれいな水で小魚もたくさん泳いでいた。食堂にあった甘露煮はここら辺の小魚を使用しているのかもしれない。私は服を脱ぎ、川に入ってタオルで体の汗を流した。

先ほど言った板塀は、すぐ近くにあるのだが、先ほどの忠告を破るわけにもいかなかった。板塀の中がどうなっているのか、気になって仕方がないが、それを確かめるチャンスはまたいつか来るだろうと、私はこの日は寺に戻ることにした。寺に戻りながら、私はふと和尚は趣味であのお寺の和尚をしているような気がした。青年僧の話では、しょっちゅう高知の街へ下りている。料亭を今も経営しているのなら、檀家もないあの寺で仏道に専念できるわけがないのだ。それに工場長の知り合いというのも、なんとなく趣味でやっているように私には思える要因だった。もっとも、趣味であろうが何であろうが私には一向に構わないのだが、本堂が火事になった経緯は和尚が知っているに違いない。あるいは和尚が関与しているのではないか。そのことは確かめておきたかった。だが、直接和尚に聞く勇気はなかった。

前にも言ったように私は一ヶ月の予定で、それ以上いる考えはない。だから和尚が何者であろうと私にはどうでもいいのだ。

自分のことだけを一心不乱に見つめよう。そうして山を下りて、また新しい人生を始めよう。それが私の考えであった。

## 8

昼飯も朝食と変わらない内容だったが、労働をしたということで気兼ねなく、また美味しく食べることができた。

青年僧は午後も畑仕事に出るが、私には自分のしたいことをすればいいと言った。私は午後も畑仕事を手伝うと答えた。

ところで、このときまで、私は和尚の姿も他の参禅者の姿も見かけることはなかった。和尚は隠者だからそれでいいが、他の参禅者は多分一人もいないのだろう、と私は思った。

昼食後、私は自分の部屋で、しばらく横になっていた。この寺には本堂だけではなく、肝心の経典、またそれに関する本もなかった。私は、せっかくお経を勉強しようと思って来たのにそれができないのはちょっと残念だった。和尚からの説法も期待できそうにないし、青年僧も自分のことで忙しいようで尋ねるのも悪いような気がした。もちろん、お経の話は雑談とは違うわけだから、親切に教えてくれる可能性はあるが、私は一ヶ月無心で暮らすことを決めているので、余計なことは考えないことにした。お経が余計なことだと言うのも変だが、少なくとも私には必要なかった。私には、作務や坐禅の方がより重要だった。

お経の勉強は町中でもできる。町中でできないのは、無心で暮らすことだ。なぜなら、山の中なら何を着ようとどのように暮らそうと誰も見ている者はいない。町中なら、まず服装のことに気を遣う。他人の目が気になり、一日中つまらないことで悩んだりしなければならない。そう考えると、案外山での暮らしも満更悪くはない。それにあの板塀というミステリーもある。あの囲いの中で、和尚はいったい何をしているのだろうか。それを思うだけで、わくわくするではないか。

ところで話は変わるが、青年僧は僧堂の二階の部屋に住んでいた。私はまだ二階に上がっていないので、ひょっとすると二階の方に、他の参禅者がいるのかもしれないと思った。というのは、ここは雑談が禁止なので、それで静かなのではないかと。

で私はそのことを確かめるため、僧堂の中を掃除するついでに二階を調べることにした。そうすれば二階に参禅者がいるかどうか分かるだろう。また建物の構造も分かる。しかし、今日はすでに午後も畑で働くと青年僧に言ったので、明日そうすることにした。

## 9

翌日の昼、私は食堂にいた青年僧に、午後は僧堂の方を掃除したいと言うと、「それは助かる。だが、二階はやらなくていい」と言われた。青年僧は続けて、「二階は私がやる。部屋には鍵がかかっているから」と。

それを聞いて私は、妙に思った。というのも、一階の各部屋には扉さえないのだ。どの部屋もあけすけで、これが禅というものかと私は感心していたのだが、では二階は普通の住居なのだろうか。しかしそれにしても、鍵をかける必要があるのだろうか。この山奥の貧乏寺に、誰が盗みに入るといのか。それとも、見られては困るものが部屋の中に置いてあるといのか。

私は急に俗界に戻ったような味気なさを感じた。

青年僧は昼食後、しばらく二階で休憩していたが、再び畑の方へ仕事に行った。

私は寺にあった雑巾で廊下を拭き掃除することにしたが、このチャンスに、二階に上がって見ることにした。どうしても気になるのだ。

二階は部屋が四つほどあった。いずれも扉が閉まっていて、青年僧が言ったように錠（南京錠）が掛かっていた。いや、その中の一つの部屋だけ鍵が掛かっていなかった。ということは現在この部屋に人がいるのだろうか。

私は足音を忍ばせて、その部屋に近づいた。そして耳をすませ、中の様子をじっとうかがった。というのも、廊下に面した壁には窓がなく、人がいるのかいないのか判然としなかったからだ。物音はしないのだが、それでいて誰かがいる気配がした。

思い切ってその引き戸を開けてみようかと考えたが、いきなり開けて、もしも中に人がいたらいけないので、一言声をかけて開けることにした。中に人がいれば返事をするだろう。

で、私は声をかけた。

「すみません。誰かいますか？」

返事はなかった。

「いないのでしたら、開けますよ」と私は念を押した。

やはり返事はなかった。

ここまで言ったのだから、仮に中に人がいても何も問題はないだろう。謝ればすむことだ。別に盗みに来たわけではない。と、思い切ってその引き戸を開けたのだ。

作務衣を着た色の白い美少年が、部屋の中央にあぐらをかいて座っていた。大きな青いタオルで頭を覆っていたが、部屋の中にいるのになぜ頭を覆う必要があるのだろうか。私は疑問に思った。もちろん作務をする場合は、手ぬぐいやタオルで頭を覆うことはある。それは頭を坊主にしているもので、ちょっとしたことで傷つきやすく、要するにヘルメットの代わりである。ということは、この美少年は本格的に頭を丸めているのだろうか。この本堂もない、まがい物の禅寺で、よく頭を丸めて修行をする気になったものだ。私は感心した。

取り敢えず私は、戸を開けたことを詫びた。

しかし、美少年はやはり何も言わず、じっと私の顔を見つめていた。いや、睨みつけていた。私はいろいろ彼に聞いたかったが、その射るような視線に、居づらくなり戸を閉めて退散した。私は気分が悪かった。ちょっと戸を開けただけなのだ。しかも開ける前に声をかけたではないか。なのに、なんであれほど私を憎むのか。憎む。確かにあの目は人を憎む目だった。私は頭を振り絞った。かつてあの美少年に、私はどこかで会っていたのではないかと。しかし、私の記憶の倉庫を隈なく探してみても、あの美少年の姿はどこにもなかった。頭を大きなタオルで覆っているせいなのかと、思い直してもやはり分からないものは分からない。

断言できるのは、美少年はこの寺に来てまだ間がないということだ。というのは、そばに大きなバッグがあったからだ。おそらく私が畑で作務をしている間にこの寺に来たのだろう。そして先に戻っていた青年僧から、二階の部屋をあてがわれたに違いない。しかし、なぜあの美少年にだけ特別に戸のある二階の部屋をあてがわれたのか。私は少々不満だった。私の部屋を雑居房とすれば、あの美少年の部屋は畳が敷かれた個室のような感じがしたからだ。ひょっとすると、あの美少年は、この寺にとって特別な人なのだろうか。だが私は妬んではない。ひどい目つきで見つめられたにもかかわらず、私はあの美少年に対して一つも悪い感情を抱かなかった。それどころかあの華奢で上品なスタイルに、私の心は妙にそわそわしたのだ。断っておくが私にそういった趣味はない。だが男でも、心とそんな気にさせるような容貌を彼がしていたことは事実である。そのことが、あるいはあの美少年を二階の戸のある部屋、つまり鍵の掛かる部屋をあてがわれた理由ではないかと私は考えた。

また美少年があのと看も言わなかったのは、雑談が禁止になっているせいなのだろう、と私は好意的に受け取ることにした。他の参禅者と親しくなるとは、修行の妨げになると、和尚か青年僧に言われたのではないだろうか。それにしても、あの鋭い目つきだけは、どうにも理解できなかった。だがそれも、これから何日も一つ寺に暮らすのだから、きっといつか打ち解けて話をするチャンスがあるように私は思った。というか、それを期待した。

## 10

私は廊下の拭き掃除を終えると、本堂の跡地に建っている粗末な座禅堂の中で座禅をした。心を静めるためだ。座禅は、やろうと思えばどこでもできる。しかし、初心者の私にはやはり専門のお堂があるというのはありがたかった。そこにいるだけで、特別な気分になれるからだ。

山の中の静かな環境で、小鳥のさえずりが始終聞こえていた。そのうち蝉も鳴き始めるだろう。

この寺では、無念無想が座禅の作法だということは、以前にも書いたが、しかし私は、先ほどの美少年のことが頭に浮かんで仕方なかった。彼はどういう考えでこの寺に来たのだろうか。もちろん禅の修行をするためなのだろうが、それならもっとましな寺はいくらでもあつたらうに。よりによつて本堂がない、こんな破れ寺を選ぶとは。

となると、やはり彼はこの寺と何か特別なツナガリがあるのかもしれない、と私は思った。

私は最初、一ヶ月を無心で過ごす予定だったが、どうもそういう具合にはいきそうになかった。

## 1 1

この寺には電気が来ていない。それはつまり暗くなるまでにしておかなければならないことがあるということだ。もっとも今の季節、日が長いので、そう慌てる必要もないのだが、三日に一度の風呂も、五右衛門風呂に水を入れるのは明るいうちでなければできなかつた。

夕刻前に、青年僧が私に風呂の準備をするので手伝ってほしいと言って来た。僧堂の外に風呂小屋があり、薪が小屋のそばに雨がつかからないように積んであった。一番大変なのはやはり水汲みである。十メートルほど離れたところに井戸があり、その手押しポンプでバケツに水を汲み、それを風呂桶まで持って行くのだ。何十往復もする。なかなかの重労働で、なるほどこれでは毎日風呂に入る気にはならないだろう。原則的に雨の日は風呂に入らないらしい。で、水が桶に一杯にたまると薪をくべて湯にするわけだが、風呂に入る順番はとくに決まっていない。序列という俗世間的なものが一切ないのだ。だから和尚が真っ先に入るわけでもなかつた。

和尚は風呂があるかどうかは煙突からの煙を見て確認するようだった。五右衛門風呂は湯が冷めにくく、沸き立ては熱くて水を足さないと入れない。和尚が何歳なのか私は知らないが、おそらく他の人が入ったあとの方が、湯がこなれていいのかもしれない。

また風呂に入るときは、入浴中と書いた板を和尚のいる小屋の方に向けて立てる決まりがあった。そして風呂から出たあとは忘れずにこの板を裏返しにしておかなければならなかつた。

私は初めての五右衛門風呂だったので、青年僧から入り方を教わった。鉄の釜だから、浮いている底板を足で沈めてその上に乗らないと、やけどをするというのだ。それで私は風呂桶に入らないことにした。外で体を洗うだけにしたが、それは、あとから入る人のためでもあった。風呂桶の湯を汚したくないからだ。

この季節、湯船に浸からなくても寒くはないし、さっぱりした気分になることは同じだった。ただ体を洗う湯も風呂桶の湯だから、一番目の湯以外はあまりきれいとは言えなかった。風呂桶の湯が少なくなれば、あとの人のために水を足さなければならない。

私は畑仕事のあと、川で水浴びをするので、風呂に入る必要は特になかった。しかし、青年僧が今日は風呂にしようと言え、手伝わないわけにもいかず、そうすると汗をかくので、ついでに風呂に入るという状態だった。おそらくこういう面倒な作業が、禅の修行なのだろう。

## 12

何日もそこで暮らせば生活のリズムというものができてくる。町中で、汲々と暮らしてきた私には、この山寺での生活がこの上なく新鮮で、なかなか味わい深いものになっていた。

当初、私が予想し、かつ心配していた禅寺の厳しさというものが、この寺にはまったくなかった。それは和尚が隠者で青年僧が一人だけというのものもあるだろうが、それ以上に私は、本堂がないということで、寺の威厳を失っているような感じがした。しかしまた、これが禅の本質かもしれないと思った。自由な精神こそ禅なのだから。座禅でも作務でも強制されてするものではない。もちろん、だからとってのんびんだらりんと過ごしていいわけでもないが、不思議なことに、この寺には何かをしないではいられない、そんな空気があった。自発的に草刈や掃除をしないではいられない、そして、そのあとには必ず充足感があった。それは工場で仕事が終わったときの充足感に似ていた。

ところで私には気になることがあった。それは数日たった今も、和尚の姿を見ていないことだ。夜中になれば僧堂の裏の和尚の小屋から明かりが漏れるので、和尚はいるのだろうが、昼間、外で和尚の姿を見たことがないのだ。一日中、ずっと小屋の中にいるのだろうか。青年僧の話では、この周辺の山でよく和尚と遭遇するらしい。青年僧は、五右衛門風呂に使う薪を集めに頻繁に山に入るのだ。因みに私は、そのとき二宮尊徳のように薪を背負って戻るのかと聞いたら、一輪車を使うという。もちろんこれは、傾斜の緩やかなところでしか使えないのだが、一輪車があるとないとでは倍の量違ってくるという。さらに和尚は山で何をしているのか、と聞くと青年僧は首をひねりながら、和尚にとって山は本堂の代わりなので、おそらく行をしているのだろう、ということだった。あの盆地にある板塀の囲いといい、薄気味の悪い和尚である。



この寺を去るまでに、私は何としてもあの囲いの中を確かめてやろうと思っているが、それは間違いなくこの寺での最大の土産になるだろう。

そしてもう一つ私が気になっているのは、やはりあの二階にいる新米のことである。私よりあとから来たにもかかわらず畑仕事に一切携わろうとしないのだ。そればかりか昼間、ほとんど部屋から外に出ようとしなない。食事のときは、私を避けて一人で食堂で食べているのだろうが、いったい彼は何をしにこの寺に来たのだろうか。はなはだ疑問だった。座禅堂にもいたためしがないのだ。しかし、こちらから強いて接近するわけにもいかなかった。というのも、すでに述べたように、彼は私との距離をとるために二階の部屋をあてがわれたに違いないと思っていたからだ。だから私が近づけば和尚や青年僧が何か言うに決まっているのだ。

だが、それでも運良く、私は一度美少年の姿を庭の方で見かけた。畑の仕事から帰って来たときのことだ。いつもよりかなり早く帰って来たので、おそらく彼は私がこんなに早く帰るとは思わなかったのだろう。驚いたような顔をして私を見た。私はこれほど気品のある顔立ちと優美な姿をした少年を見たことがない。頭はやはり青いタオルで覆っているが、作務衣を着てサンダルを履いて立っているその姿に、私は神々しいものを感じた。私はふと男とも女ともつかないあの中宮寺にある菩薩半跏像を連想した。

お恥ずかしいことに私は、この美少年に恋をしたのだ。

### 13

それからというものの私の頭には、絶えず美少年のあの優美な立ち姿があり、話をしたいという思いが募ったが、会うこともできずにいた。同じ屋根の下にしながら、会えないのだ。もっとも、この寺では雑談が禁止なので、会えても話はできないのだが、せめて間近で見つめていたいと思った。

という具合に四六時中、私は美少年のことを考えていたのだが、しかし、その大半が疑問形だった。たとえば、彼はどこから来たのだろうか。また来た目的は何なのだろうか。部屋の中で何をしているのだろうか。座禅でもしているのだろうか、といったように。仮に部屋の中で座禅をしているとしても、しかしそれでは、この寺に来た意味がないではないか。座禅堂があるのだ。ここでしないでどうする。ということは、やはり私を避けているのだろうか。

とにかくこの寺には不思議なことが多かった。本堂がないというだけでも常識はずれだったが、和尚そのものが胡散臭いし、青年僧はわりとマトモだが、しかしこの奇妙な寺で、実質一人で修行しているようなものだから、よく続いていると感心せざるを得なかった。禅の修行は大勢いるからできる、というところがあるからだ。もっとも、ここは他の禅寺のような厳しさがなく、すべてが自由であるから、それで続いているのかもしれない。しかし私は、この青年僧の将来に対して、他人事ながら懸念を持っていた。というのも、仮にこの寺の後継者になるとしても、本堂のない寺に檀家は集まらないだろうし、つまり収入がない。今は和尚がいて、和尚が現在も料亭の旦那であれば、その収入で寺は維持できる。また現在の畑をもっと大規模にすれば、それによる収入も期待できないことはない。自給自足の生活なら、なんとかなるだろう。

あるいはもしかすると、青年僧は、どこか他の寺の生まれで、一定期間この寺で修行をしているだけかもしれない。専門僧堂の多くがそういうシステムだから。しかしこんな本堂のない廃寺で、何年修行してもメリットはないだろうに。

不思議と言えばこんなことがあった。美少年が来た夜のことだ。私は床についていた。なぜか寝付かれない夜で、うつらうつらしていた。すると戸口の方で何やら人の荒い息が聞こえてくるのだ。前にも書いたが、この部屋には戸がない。

誰かが薄暗がりの中で（寝る時はランタンの明かりを細めていた）こっちを見ているような感じがした。私は相手に気づかれないように目を細めて戸口の方をうかがった。すると、たしかに誰かがそこにしゃがんで私の方を見ていた。青年僧ではない。またあの美少年でもない。頭を丸めた年寄りなのだ。子供のような丸い顔をしていて、背も低いようだった。ランタンの仄かな明かりに照らされて、その目がらんらんと不気味に光っていた。私はぞっと寒気を覚えた。思わず声をあげそうになった。それに気づいたのかその人影は、すぐに廊下を向こうに去って行ったが、おかしなことに私の耳には四足の動物が走り去るような音が聞こえたのだ。

どこか遠くの方で山犬が吠えていた。

なんだか知らない国へ一人で来たような、妙に淋しい心もとない気持ちに私はなった。

あるいはひょっとすると、こういうことは毎晩のようにあったのかもしれない。私が眠りこけて知らないだけだったのだろうか。

だとしても、今の人物はいったい何者なのだろう。頭を丸めているところを見ると、この寺の関係者なのだろうが、あの逃げ方は尋常ではない。マトモな精神をしているとはとても思えない。——和尚、私はふと和尚のことを思い出した。私はこの寺に来て、まだ和尚を目にしていないのだ。すると、今のあの小柄な人物が和尚なのだろうか。私は朝方まで寝付けなかった。

#### 14

この日は朝から雨が降っていた。畑の方は休みということになり、私にはちょうど良かった。座禅三昧の一日にしよう。それで睡眠不足を補おう。もっとも、一日中部屋で横になって眠っていても誰も文句を言う人はいないのだが、しかしそれでは、何となく申し訳ないような気がして、一応格好だけでもこの寺で修行をしている風に見せたかった。仏道は形から入るのが大事だと、誰かから聞いた覚えがある。

それで私は、午前中は三回、午後も三回、傘をさして座禅堂に向かった。午後は青年僧もそこで座禅をしていたが、やはりあの美少年は一度も姿を見せなかった。

私が頻繁に座禅堂に来たもう一つの理由は、ひょっとあの美少年に遭遇するのではないかと期待したからだが、正直言って、座禅など部屋の中にもできるのだ。しかし、部屋でする坐禅と座禅堂でする座禅とは、気分的に違うものがあり、座禅堂でする座禅は、さすがにしゃんとした心持ちになった。

ところで、この寺には時計がないことはすでに述べたが、時計のない暮らしというのは、こういう山の中で世間と隔離しているからできるのだろう。都会では時計を見ずに過ごすことはまず不可能である。不安でもある。この山の中でさえ、今何時だろうと気になるくらいだから。

晴れた日なら太陽の位置で今何時頃か見当がつくが、雨の日や曇った日は太陽がどこにあるのか分からない。夏場だから遅くまで明るいことは明るいのだが、それがかえって、今、夕飯を食べる頃かどうか判断に苦しむのだ。それというのも、あの美少年は私を避けている。私の方でも、あえて彼に近づこうとはしなかった。座禅堂はちゃんとした理由があって来るわけだから、ここで会えるのが一番だった。しかし、食事のときは、彼よりも早めに済ませたかった。でなければ彼は、お腹を空かせて待つことになるからだ。時計があれば今何時かと悩まなくてすむ。時計のない生活も自由なようでいて、意外と自由ではない。本当の自由は、たった一人で暮らすことなのだ、と私はこの寺に来て痛感した。

私は青年僧に昨夜のことを尋ねた。すると青年僧は、私が見たあの小柄な老人が和尚だという。さらに青年僧は、ここの和尚にはじつに変わった性癖があって、普通の者にはとうてい理解できないが、しかし悪い人ではないから心配しなくていいと言った。そう言われても、私は気味が悪くて仕方なかった。部屋に戸があれば、誰も入らないように紐かなんかで工夫するのだが、戸がない以上どうすることもできなかった。一晩中起きているわけにもいかず、というのも、ひょっと眠っている間に和尚が私の枕元に来て何かいたずらをするのではないかと心配で仕方なかったのだ。

それで私はふと気がついた。二階の部屋に鍵がかかっていた理由が。和尚の侵入を防ぐためではないかと。

そんな心配をしていた夜のこと、私はランタンの明かりの中で、日記を書いていた。日記を書く習慣は、それまで私になかったのだが、この山寺に来て一日一ページ、毎日書いていこうと決めていた。それは私にとって、札所巡りの御朱印の代わりだった。お遍路は霊場で御朱印を貰い、それが大切な宝となるが、私は日記を書いて、それを人生の宝物にするつもりだったのだ。

と、急に廊下の方が明るくなった。振り向くと戸口のところで、和尚がカンテラを持って立っていた。

私の顔を見て、「ジョウドへ行ってまいります」と言うのだ。

ジョウド、私は頭の中でつぶやいた。ジョウドとは、何のことだ。山寺の和尚がジョウドと言え、私には極楽浄土しか思いつかなかった。しかし、この山奥のどこに極楽浄土があるというのか。それに今まで姿を現そうとしなかった和尚が、なぜわざわざそれを言いに来たのか。私はあまりのことで返答もできずにいた。

すると和尚はそれ以上何も言わず、すっと幽霊のように向こうの方へ姿を消した。私は気になった。それで、部屋を出てその様子を眺めた。和尚は食堂の勝手口から外に出た。こんな夜中に、和尚はどこへ行くつもりなのだろう。と、あとをつけてみたくなったが、しかし、それは思いとどまった。——あの和尚は普通の人間ではないのだ。もしも和尚のあとをつけて、それがばれたら、私はこの寺を追い出されるかもしれないのだ。

それで私は建物の中から、こっそり眺めるだけにした。

和尚は畑の方角に向かって歩いていった。

夜中に何しにあそこへ行くのだろう、と私は訝ったが、すぐにあの板塀の囲いを思い浮かべた。青年僧の言う和尚の隠れ家のことだ。そこに行くつもりなのだろうか。しかし、あの中に何があるというのか。建物があるようには見えないのだが。あるとしたら人間ほどの高さしかないだろう。しかし板塀で囲っている以上、何かがあるのだろう。

だがそれにしても、夜中に行くというのが理解できなかった。仮にあの隠れ家に行くとしても、夜中に隠れに行く必要はないだろう。この山寺こそ、十分に隠れ家と言えるのだから。実際、和尚はしょっちゅう高知の街へ行くという。高知の街を表舞台とすれば、ここは舞台裏に相当する。隠れる場所としては、最適ではないか。

あのまるで子供のような体型をした和尚には、どこか得体の知れない気味の悪さがあるが、それはその奇妙な日常生活からきているのだろう。マトモな和尚でないことは確かである。

やはりあの板塀の中を調べる必要がある。

そんなことを考えていると、和尚はふと立ち止まった。こちらを振り向いた。じっとしていた。誰かを待っているようだった。

しばらくして、二階からあの美少年が、カンテラを持って降りてきた。美少年も建物の外に出て、遠くで待っている和尚の方へと向かった。

二つのカンテラがゆらゆらと、盆地に向かって行くのが見えたとき、私はひどく動揺した。よっぽどあとをつけようかと思ったが、今回だけは我慢した。眠れない夜になった。

## 16

翌朝、私は睡眠不足で眠たかったが、いつも通り畑仕事に出た。私は主に草刈を担当していた。これが禅の修行には最適で、無心になれたのだが、しかし、この日は昨夜のことが頭にあって、雑念で一杯だった。和尚と美少年は、この盆地に何をしに来たのだろう。そのことが、私の頭を占領していた。その痕跡を探ろうと、私は草刈の手を止めて、周囲を観察した。

だが、草が茫洋と茂っているばかりで、手がかりになるようなものは何も見当たらなかった。

青年の話では、年度によってはこの盆地全体が菜の花で埋め尽くされることもあると言うのだが、今は雑草だらけで、そして目につくのは、やはりあの板塀の囲いである。そこ以外に、二人が行きそうな場所はないように私には思えた。

だがそれにしても、二人はいつの間にそんな間柄になったのだろうか。あの美少年は、寺に来てまだ間がないのだ。もしかすると、二人は以前からの知り合いで、二階の部屋をあてがわれたのも、特別な関係があったからではないだろうか。普通の参禅者の扱いとは違う。しかし、であれば、その二階の部屋で会うなり、また和尚の小屋で会うなりすればいいものを、なぜこの盆地なのか。それに何より、なぜ和尚はわざわざ私の部屋に来て、浄土へ行ってまいります、と言ったのか。この盆地全体が浄土なのだろうか。それともあの囲いの中が浄土なのだろうか。私は仏教のことはさっぱり分からないが、浄土というのは、極楽浄土の略である、ということぐらいは知っている。では極楽浄土とはどういうものか。昔何かの絵で見た限りでは、蓮の花がいたるところに咲き誇っていた。ではあの囲いの中が蓮池になっているのだろうか。川のそばだから、水を取り入れることができる。季節的に、今がちょうど花が咲く頃でもある。また蓮という植物は、大きな葉っぱがあり、花も葉っぱも長い茎の先端にあるから、人が隠れるにはちょうどいい。

この日も青年僧は、用事があるからと言って先に帰った。私も昼には戻るわけだが、太陽の位置を確認して、まだそれまで十分時間があつた。

それで今日こそ、あの囲いの中を確かめることにした。

仮に和尚たちが、昨夜、あの囲いの中に入ったとしても、もうだいぶ時間がたっているわけだから、今も中にいる可能性は低いと私は見た。

で私は板塀に近づき、仔細に調べた。しかし、五十メートル四方のこの囲いには、どこにも隙間はなく、また節穴もなかった。扉は一箇所あつたが、大きな南京錠がかかっていた。それを見て私は、現在この中には誰もいないと判断して、取り敢えず安心はしたが、しかし鍵を壊して中に入るわけにもいかず、せっかくのチャンスをどうすることもできなかった。私はやむなく寺に戻ったのだ。

## 17

あの美少年は、何者だろう、その思いが強くなった。座禅堂に現れることもなく、畑仕事をするわけでもない。また私を避けていることは確かで、食事も私が畑に行っている間か、座禅堂にいるときに済ませているようで、食堂で会ったこともない。

あるいはひょっとすると、青年僧が料理を作り二階の部屋に運んでいるのかもしれない。というのも、青年僧は料理が巧みで、そしてかなり多めの料理を作っているのを見たことがあるからだ。

美少年は、昼間、滅多に僧堂の外に出ない。もっとも、この前のように私が畑に行っている間に外に出ているのかもしれないが、しかし夜になると、あれ以来、決まって和尚と一緒に出かけていた。そして不思議なことに、その前には必ず和尚が私の部屋に来て、浄土へ行ってまいります、と断るのだ。私はいつも、はい、と頷くだけで、何も尋ねなかった。浄土とはどこですか？と聞けば良かったかもしれないが、私の性格がそれを拒んだのだ。多分あの囲いの中だろうと思っていたから、あえて尋ねる気がしなかったのだ。ただ、なぜいちいち私にそのことを知らせる必要があるのか、と疑問には思っていた。黙って行けばいいだろう。

もしかすると私も一緒に来なさいという意味だったのかもしれない。しかし私が行けば、おそらくあの美少年は行かないはずだ。私を嫌っているから。それでは意味がない。私はなぜ二人がああ盆地へ行くのか、それが知りたいのだ。となれば、二人のあとをこっそりつけるしか方法はなかった。で、私はそのチャンスを待つことにした。

## 18

ある日の午後、私は食堂の拭き掃除をしていた。前にも書いたが、この食堂は土間に板（すのこ）を置いているので、砂が上がりやすく、裸足で歩く夏場は特にきれいにしておく必要があった。因みに私は畑へ行くときは長靴を履くが、そのときは靴下を着用する。それは靴擦れを防ぐためだ。

さて、そのとき食堂の外でガタガタ音がしたので、私は何事かと勝手口から外を覗いてみると、プロパン屋がプロパンガスの容器を台車に載せてやって来たところだった。私は久しぶりに一般人に会えてうれしかった。この特殊な世界に、ビリビリッと隙間が開いたように感じた。

プロパン屋は帽子をかぶった三十歳くらいの青年で、長い坂道を、台車を押して来たために、顔から汗を流していた。

「これはどうもご苦労さんです」

と私は声をかけた。

プロパン屋は笑顔で、「ここに来るのは、いつもいい運動になるよ。ところで喉がからからなんだ。ちょっと水をくれるかね」と顔の汗を、首に下げたタオルで拭きながら言った。

私はどんぶりに井戸水を注ぎ、そしてよく熟れた大玉のトマトも一緒に勝手口に立っているプロパン屋に差し出した。

「ここに座って食べてください」

「おお、これはかたじけない。美味しそうなトマトだ」

とプロパン屋は言って腰を下ろし、むしゃむしゃとトマトを頬張った。

私はこのプロパン屋から、何かヒントが得られるような気がした。というのは、青年僧の話ではこのプロパン屋は、和尚の知り合いの息子なのだろうから、和尚について何か知っているのではないかと思ったのだ。で私は、こう聞いた。

「こんな山の中に重たいプロパンを運ぶのは大変でしょう。ところで、聞いた話では和尚のツテでここにプロパンを持って来られるようになったとか……」

「そう。ここの和尚と俺の親父は友人なのよ。というのも、和尚は高知の方で料亭をやっているんで、それで古くからの知り合いなのさ」

「じゃあ和尚は今でも料亭の主人なのですか？」

「ばりばりの現役だよ。よくあれほど活動的にやれるもんだと俺はいつも感心している」

「活動的と言いますと？」

「それはここではちょっと話せないな。和尚が聞いているかもしれないから。ところで、あなたは参禅でこの寺に来たのかね？」と今度は、プロパン屋が聞いてきた。

「ええ。ある人からこの寺を勧められて……」

「ほう、それは珍しい。この寺を勧める人がいるだなんて、その勧めた人は、多分地元の人ではないでしょう」

「ええ。本州です。なんでも和尚の知り合いらしいです」

「知り合い」プロパン屋は少し怪訝な表情をした。「あの事件を知っていれば、人に勧めるような寺ではないと分かるんだけどね」

「あの事件？」私は聞き捨てならない言葉を耳にしたと思った。「あの事件とは、いったい何のことでしょうか？」

「もうだいぶ前のことだが、新聞にも載ったことのある事件だよ。もっともそれは、単なる火事としてで、刑事事件にはならなかったのだがね」と言って、プロパン屋は、私の方を見た。刑事事件こそ相応しい、と暗に示したのだろうか。

私は以前青年僧から、この寺の本堂が火事になった話を聞いているが、そのとき私は、前の和尚はそのあとどうなったのだろうか、と疑問に思ったのだ。そのことに関することなのだろうか。刑事事件が相応しいというのなら、放火だったのかもしれない。

「じゃあその火事で死人が出たのですか？」と私は聞いた。

「出た」とプロパン屋は、はっきりと答えた。「今の前の和尚がその火事で亡くなった。不審火だったので、地元の者はあれこれ推測をしたものだ。そして多分——」と言いかけて、プロパン屋は慌てて口を閉じた。和尚のいる小屋の方にちらっと目を向けたあと、「だから俺は、なぜあなたにこの寺を勧めたのか疑問なのだ。地元の者でさえ怖くてこの寺に近づかないというのに。あなたは俺にトマトをくれた。この寺に来て、俺にトマトをくれたのはあなたが初めてだ。これも何かの縁。あなたに本当のことを教えてあげよう。しかし、ここではできない。二キロほど下ったところにトラックを置いてある。俺はプロパンを交換すると、そこに戻るから、それより前に向かってほしい。そうすればあとから俺が追いついて、どこか適当なところで話ができると思う」

私はすぐに承諾した。一気に謎が解明されるような気がした。

## 19

一キロほど行ったところで、プロパン屋が私に追いついて来た。台車を押しているが下り坂なので、かえってスピードが出ていた。

私たちは脇の林の中に入り、草の上に座り込んだ。

私は、わくわくしていた。あの和尚は、一見小柄でやんちゃ坊主のように見えるが、それでいて得体の知れないところがあり、とんでもない事実を聞かされるような気がしたからだ。

プロパン屋は、こうしゃべりだした。

「俺はあの和尚の悪口を言うつもりはないが、しかしあの和尚には昔から良くない噂がある。それも人の命に関わることなので、あなたにもちょっと耳に入れておく必要があると思って、こうして話をするわけだが、あの和尚には困ったことに男色の気があるのだよ。」

好色というのも問題だが、男色は男の多い禅寺であってはさらに問題なのだ。和尚は若い美しい男に目が無い。それで過去に、いろいろもめごとがあった。あなたも知っているとおりに、あの寺には本堂がないが、その原因となった火災も、そのことに起因するのだ。そのころ和尚はただの参禅者に過ぎず、家業である料亭をほっぽり出しては、ちよくちよくあの寺で修業していた。修行と言っても真似事で、そんなに厳しいものではなかったはずだが。さて、今の和尚と区別するために、そのときの和尚を住職というが、その住職もちょっと変わった人で、独身だった。まあ禅寺の和尚は一風変わった人が多く、独身というのも別に珍しいことではないが、そのころの檀家の話によると、仏事の際によく物を盗んだらしい。本当かどうか分からないが、物欲の深い人だったようで、今の和尚をとりわけ気に入っていたのは、和尚がよく食料や物品をあの寺に布施したからだ。とても仲が良かったのだが、それがあることによって、その仲が一変してしまった。そのあることというのが、男色にかかわることだった。といって住職に男色の気があったわけではない。男色はあくまで和尚の方で、住職はそれを阻止しようとしたのだ。というのも、そのころ二人連れの若者が、あの寺に参禅にやって来たのだが、そのうちの一人が、女性のようにしなやかな若者だった。和尚はその若者にいっぺんに心を奪われてしまったのだ。若者たちは、十日間の予定で寺に泊まることになっていたが、和尚は何かにつけて、その美貌の若者に接した。作務は清掃から畑仕事までいろいろあるのだが、常にその若者のそばにいた。風呂のときは一緒に入ろうと、若者を驚かせたことがある。あの風呂は一人入るのがやっとの狭さだから、誰だって嫌がるだろう。若者は仕方なく住職にそのことを告げた。住職としては、今まで可愛がってきた人間が男色の気があるということに気がつき、注意した。しかし和尚はこれに懲りず、ある夜若者の部屋に忍び込んで、寝ている若者の顔を舐めまわしたのだ。若者は再び住職にそのことを告げた。さすがの住職も、これには呆れかえってしまった。寺を去るように言ったのだ。二度と来てはならないと。

和尚は心の中で激怒した。今までさんざんこの寺に尽くしてきたのに、なんてひどい仕打ちなのだ。この寺は和尚の心の拠り所だった。和尚は料亭をやっているが、それは先代から受け継いだに過ぎず、それほど興味がなかった。料亭の経営は和尚の苦痛でしかなかった。というのも、和尚は元来人間嫌いで、また子供のように体が小さいことにコンプレックスを持っていた。だから、料亭のような気取った連中が来るところはあまり好きではなかったようだ。姿形のいい若い男に憧れがあるというのも、その影響だった。だから和尚が山寺に来た理由は、コンプレックスとなっている自分の身を隠すためではないか、と俺は思っている。耳にした話では、和尚はあの寺の周辺に隠れ家というのを特別に造っていて、そこを極楽浄土と名づけているらしいが、その隠れ家を造るのを手伝ったのが、例の若者の片方で、今は本州のある都市に住んでいる。なぜそういうことを俺が知っているかと言えば、それが俺の親戚だからだ。さて、話を元に戻すと住職から寺を出て行けと言われた今の和尚は、その真夜中にとんでもないことをしてしまった。住職の首を紐で閉めて殺害したのだ。もっともこれは俺の推測で、どのように殺害したかははっきり分からない。とにかく和尚は、住職の遺体を本堂に運び、そして火を放ったのだ。小柄な和尚が大変だったと思うが、住職も体格のいい方ではなかったようだ。灯油か何かまいたのだろう、瞬く間に本堂は火の海となった。和尚にとって幸運だったのは、あの寺には電話がないから、消防車を呼ぶことができない。本堂はすっかり焼けて、柱と屋根が残るのみとなった。住職の遺体も性別さえ分からない状態になっていた。警察が来て調べたが、放火なのか失火なのか判断がつかなかった。真夜中に住職が本堂にいたことは不審であったが、といって犯罪と呼べるような形跡もなかった。よく強盗が犯行を隠すために放火をして逃げるといっているのがあがあるが、仮にそうだとした場合も本堂が焼失した以上何を盗まれたのか分からないし、また焼死した遺体は住職であると断定できても、それが殺害されたものか自死したものか、あるいは単に事故であったのか、それも判断できなかった。もちろん、警察は寺にいた和尚や若者たちに話を訊いたが、しかし、誰も真相を話さなかった。和尚は別としても、若者たちは和尚と住職が仲違いしたことを知っているのだから、事の真相にうすうす気づいていたはずなのだ。しかし、はっきりした証拠もなく、また和尚の報復を怖れて、触らぬ神に祟りなしを決め込んだのだ。穏便に済ませたい警察は、強いて追求しなかった。つまりこの事件は、うやむやになったのだ。

このあと美形の若者は、すぐに寺を去ったが、それは多分和尚が怖くなったからだろう。が、片方の若者はこのあともあの寺に残っていた。それが本州に行った俺の親戚だ。この親戚は、和尚と気があった。和尚とは以前からの知り合いで、じつは料亭で働いていた仲居の子供だった。家族ぐるみの付き合いがあり、それで予定だった十日間の参禅のあとも、しばらくあの寺で暮らしていた。和尚の計画に興味があったのだ。その計画とは、さっき話した極楽浄土を造ることだ。面白いだろう。和尚は以前からその計画を立てていたようだ。しかし、住職がいる間はどうすることもできなかった。住職を殺害したのも、その考えがあったからではないかと俺は思う。どっちにしても、狂人の考えることだ。本物の極楽浄土であるわけがない。話によるとあのお寺の向こうに盆地のような場所があるらしく、そこに造ったと俺の親戚は言っていたな。かなり大変だったようだ。作業員も何人か雇ったらしいが、どのようなものか俺には詳しく教えてくれなかった。そんなものを造るより、焼失した本堂を建て直す方が大事だと俺は思うのだが。しかし、お寺の檀家はみんなあの火事で去っていったから、今更本堂を建てる気もないのだろう。実際、本堂を建てるとなると莫大な金額が必要となる。現実的に無理なのだろう。それで周辺の山を本堂に見立てていると親戚の者は言っていたな。禅宗ならそれも有りかな、と俺は思ったりもする。何事もこだわらないのが禅だから」

その話を聞いて、私は和尚が毎晩、浄土へ行ってまいります、と言うのは、やはりあの板塀の中なのだと確信した。

で私は言った。

「その極楽浄土というのは、多分板塀の囲いの中だと私は思います」

プロパン屋が、興味を持ったように私の顔を見た。

私は話を続けた。

「あの盆地にかなり広い板塀の囲いがあるのですが、和尚は毎晩、そこに通っているようなのです。そして不思議なことに、なぜか私に断って行くのです。浄土へ行ってまいりますと」

「あなたに断って行くですって」とプロパン屋は驚いたように言った。

「あの和尚は同性愛者なんだよ。だとすると、それは間違いなくあなたを誘っているね。くれぐれも注意するべきだ。それとさっきから気になっていたのだが、あなたにあの寺を勧めたというのは、いったいどんな人だね。あの寺を勧めるというのは、つまりあの和尚のことをよく知っているわけだろう。それで人に勧めるのだから俺には何か魂胆があるとしか思えない。

俺なら口が裂けてもあの寺を人に勧めたりはしないね。何度でも言うが、あの和尚は普通の人間ではないのだ。で、その勧めた人というのは、あなたとどういう関係にあるのかね？」

「私のもと上司です。というか工場長です。本州の方の」

「本州の工場長！」プロパン屋は再び驚いたようだった。「じゃあその人の名は、〇〇と言うのじゃないのかね？」

「ええ、そうです」今度は私が驚いた。

「やはりそうか。俺が今話した本州に行った若者というのが、その〇〇なんだよ。けっこう執念深い男で、俺はあまり好きではないが、親戚だからたまに会うことはある。ところで、あなたは今、彼のことをもと上司と言ったが、ではもう上司ではないということかね？」

「はい。ある事故が工場でありまして、その事故で工場長の知り合いの若者が、右手の指をプレス機で失ってしまったのですが、じつは私は工場長から、その若者の面倒を見るように言われていたのです。だから、事故が起きたのは私のせいのようにみんなに思われて、それで居づらくなって工場をやめたのです。それから一ヶ月ほどして、これも工場の先輩だった人が突然私のアパートに訪ねてきて、工場長から預かったという手紙を私に差し出したのです。開けて読んでみると、唐突にあの寺で一夏過ごしてみないかと書いてあったのです。私も気分転換にどこか旅行でもしようと考えていたところでした。さらに、手紙を持ってきた先輩が言うには、指をなくした彼は、その後自殺したらしく、ならば私はその供養も兼ねて工場長の勧めに応じようと決めたのです」

プロパン屋は、顔をしかめた。

「指をなくしたぐらいで自殺をするかね」

「彼は将来プロのギター弾きになりたかったようで、工場でもよく弾いていました。その夢が絶たれたので、将来を悲観して自殺をしたのではないかと思います」

「ますます危険な兆候だね」とプロパン屋は言った。「つまり工場長はあなたに恨みを持っているわけだろう。若者が指を失った責任があなたにある、そう思っている工場長が、あの変わった和尚がいる寺をあなたに勧めるというのは、どう考えてもおかしい。悪意があるとしか思えないね。ところであなたは、いつまであの寺にいるつもりだね？」

「一ヶ月の予定で来ましたから、まだ十日以上残っています」

「早目に退散した方が身のためだよ。俺が耳にした話では、あの寺でちょいちょい若者が行方不明になっているらしいから」

「そうですか。しかし、この前私のあとに、まだ十代の少年が一人やって来まして、その少年が毎晩のように和尚と一緒に、あの盆地、つまり極楽浄土と思われる板塀の方に向かって歩いて行くのです。大丈夫ですかねえ、その少年……」

「なんですって、だとすると二人はもう特殊な関係になっているのかもしれないね。だが、その少年もよくあの爺さんと付き合えるよ。……俺の考えでは、二人は何か別の意図があって、そのようなことをしているのではないか、と思うのだが……」

「別の意図ですか——」

「そう。成人した男性なら、金を貰えば特殊な関係にもなるだろうが、十代の少年がそこまでできるかね。少年はもっと純なものだろう。それに少年がああ寺で参禅をするというの、俺には疑わしい。あなたのすぐあとに来たというの、怪しいが、それより不可解なのは、わざわざ極楽浄土に行かなくても、逢引なら和尚の小屋でもできるだろう」

「ええ、それは私もそう思いました。あの盆地は四方を山に囲まれていますから、夜中は真っ暗です。多分二人は、夜空の星を観察しているのではないかと思います」これはもちろん誘い水である。

するとプロパン屋は笑って、「そんなロマンチックな和尚かねえ。あなたが言う板塀の囲いだが、じゃああなたはその囲いの中を見たことがあるのかね？」

「いえ、ありません。前に一度、中がどうなっているのかと、囲いの周りをぐるっと一周したことがあるのですが、どこにも隙間がなく、また節穴もないので、未だに分かりません。ただ私の想像では、川のそばにその囲いはあり、また川から太いパイプが何本もその囲いの中に通っていましたので、多分中は蓮池か蓮田か、どちらかではないかと思えます。極楽浄土と言われてすぐに連想するのが蓮の花ですから、もっともこれは私だけかもしれませんが……ちょうど今は蓮の花の盛りですし、これから満月に向かい、夜中、月の光を受けて、それはさぞかし神秘的な光景ではないかと思えます」

するとプロパン屋は、頷いて、

「あなたが今言った蓮という意見は、俺も賛成するよ。というのは和尚の持っている料亭が、蓮華亭というのだ。しかもそれは和尚が先代から料亭を継いだとき、その名前に変更したのだ。蓮の花にこだわりがあるのだろう。それにしても、その少年も、ちょっと変わっているね。参禅に来たのなら、ちゃんと座禅はしているのかね？」

「それが一度も座禅堂で見たことがないのです。部屋の中で座禅をしているのかもしれませんが……それより気になるのは、どうも私を嫌っているようなのです。私のいないときに食堂で食事をしたりしていて、私の前に姿を見せたことがありません」

「ほう、あなたを嫌っている？じゃあ、あなたはその少年に何かしたのかね？」

「とんでもない。今まで一度もその少年に会ったことがないのです。少年が寺に来てからも、ろくに話をしたことがありません。いえ一度、少年が来た日に私の方から言葉をかけたことがあるのですが、彼は何も答えず、ただじっと私の顔を睨みつけるだけでした」

「睨みつける。それは尋常ではないね。はっきりしたことは俺には言えないが、ひょっとすると、あなたは命を狙われているかもしれないよ」

「命ですか……」私は思ってもみなかった言葉を言われて、薄ら笑いを浮かべた。

「だってそうだろう。あなたに恨みを持っている工場長から、突然あの寺での参禅を勧められて、しかもあなたを嫌っている少年が、すぐあとからやって来た。どう考えても不自然だ。何か企んでいるとしか思えない。そしてあの和尚は狂人だ。俺が思うに、あの寺には一人としてまともな人間はいないね。あなたは別としても……」

「いえ、頭を丸めた青年が一人いますが……本格的に禅の修行をされていて、いつも感心しています」

するとプロパン屋は、大声で笑った。「あいつがまともに見えるかね。あいつもある犯罪を起こして、あの寺に逃げて来たのだ。和尚といい、あいつといい、あの寺が隠れ家なのさ」

「隠れ家ですか。そう言えば、盆地の囲いの中が、和尚の隠れ家だと青年は言っていました……」

プロパン屋は頷いて、「身を隠すところは、全部隠れ家になる。さっきも言ったが、和尚は男色で、あの寺で行方不明になった若者が何人もいる。俺の考えでは、その板塀の囲いがすごく怪しい。中が蓮池なら、なおのこと怪しい。常に水が浸っており、蓮が茂っていれば、その中を捜索することは困難だからな」

「というと、行方不明になった若者は、あの蓮池にいるということですか？」

「そう。だが生きていないということではない。殺されて埋められているということだ」  
私は驚いて聞いた。

「しかし、なぜ殺す必要があるのですか？」

「だから和尚は狂人なのだ。和尚は子供のように背が低いことを気にしている。コンプレックスがあるのだ。見栄えのいい若者に対して妬みがある。まあそれだけではなく、根っからの性格異常者なのだろう。その囲いに若者を誘き寄せ殺害して悦ぶ変質者なのだろう。そういう輩は、一度そういうことに味を締めれば、何度でも同じ犯罪を繰り返すものだ」

「ところでお聞きしますが、ではあの青年は、いったい何をして、あの寺に逃げて来たのですか？」

「あいつはもと蓮華亭の板前だった。ふとしたことで、ある男と殴り合いの喧嘩をして、その男を死なせてしまったのだ。殺意はなかったのだから、犯罪者というほどでもないのだが、しかし、運の悪いことにその死んだ男というのが暴力団の一員だった。それであいつは怯えた。そしてこう考えた。素直に警察に自首をして仮に執行猶予がついても、また懲役を食らってムショから出ても、暴力団から仕返しされる恐れがある。それならどこかに身を隠して、ほとぼりがさめるのを待った方がいいと。ちょうど和尚が山寺を経営している。そこであいつは、和尚に頼み込んであの寺に住むことになったのだ。頭を丸めたのも、変装の一つだ。幸いまだ誰もあいつがあんこの寺にいることに気がついていない。俺はプロパン屋だから蓮華亭にはよく行く。それで以前から奴とは知り合いだったし、和尚のこともよく知っている。さて、ここで話を戻すが、工場長の〇〇があなたにあの寺を勧めたのは、やはり何か理由があると思う。取り返しのつかないことになる前に退散することを俺は勧めるね。俺は右手の指を失って自殺したという若者のことが気になるのだが。というのも工場長の友人だった、つまりあの寺で一緒に参禅したもう一人の方も、やはり本州の方へ行っているのだ。

俺と工場長とは十歳以上歳が離れているが、彼が本州へ行く前、俺の家でプロパンガスの配達を手伝うアルバイトをしていたことがある。そのとき、もう一人の方も来ていて、なるほど和尚が好みそうな美青年だったが、その二人が今度一緒に本州の方へ働きに行くと親父に言っていたのを俺は覚えている。同じところに就職したかどうかは分からないが、同じアパートに住んでいたことは確かだ。一緒に暮らすと言っていたから。しかし、そのうち二人は別々の所帯を持つのだが、今も比較的近くに住んでいるらしい。そして、その友人もギターが趣味で、一度何かのパーティーで、ギターを弾いてみせたことがある。もしかすると自殺したのは、その友人の子供ではないかと俺は思うね」

その話を聞いて、私はあの電話に出た若い女性も、ギター弾きの家族ではないか、と思った。

「じゃあ俺は」とプロパン屋は言った。「あなたに伝えることはすべて話したから、これで帰るけど、くれぐれも気をつけて、そして何回も言うようだが、できるだけ早く退散することだ。あんな寺でまともに修行なんかできるわけがないのだから。みんな偽物なのだ。格好だけは頭を坊主にして作務衣を着ているが、それは世間の目をごまかすためのもので、真から仏道を求めているわけではない」

「これはどうもご親切にありがとうございます。退散するかどうかまだ分からないけど、気をつけて過ごします。私も何となく、いかがわしく思っているので……」

プロパン屋は頷いて立ち上がった。

「それから言うておくけど、今しゃべったことは絶対に人には言わないでくれよな。もしもあの二人に知られたら、俺は次からあの寺に行きづらくなるから」

「もちろん内緒にします。では、お気を付けて——」

プロパン屋は、再び台車を押して下っていった。

## 20

その日は風呂のある日だった。私は畑仕事のあとは、たいてい川で水浴びをして帰るのだが、風呂のある日は水浴びをしないこともあった。というのは、青年僧から今日は風呂を炊くからと午前中に言われた場合、五右衛門風呂に水を汲む作業で、再び汗を流すからだ。

そして前にも書いたが、風呂に入る順番は決まっていない。ところが、美少年が来てからというもの、なぜか真っ先に美少年が入ることになった。しかも二日に一度の割合で風呂を炊くことになった。青年僧があいつを一番風呂に入らせろと私に命じたのだが、それは和尚からの支持だったのだろう。で私は、風呂が沸くと、二階に上がってあの部屋の戸をコンコンと叩いて、風呂が沸きましたよ、と知らせるのだが、一度として返事があった試しはない。唾者なのだろうかと思ったが、戸を開ける勇気もなかった。それは最初のときのあの人を射るような目つきを再び受けるのが嫌だったからだ。

私は自分の言葉がちゃんと伝わったかどうか心配だったので、影からこっそりうかがったことがある。美少年は着替えなどを入れた袋を持って風呂小屋に向かうのだが、どうもその物腰は女性のように柔らかかった。もちろん頭はタオルで覆っている。頭を坊主にしているから、タオルで覆っている、と私はずっと思っていた。ところがあの美少年のあとで風呂に入ると、洗い場の隅にとっても長い髪の毛が落ちていて、私は驚いたことがある。肩よりも長い髪の毛で、しかも細くしなやかなのだ。この寺にそんな長い髪の毛をした人は一人もいない。唯一疑わしいのは、そのタオルで頭を隠している美少年だが、ならば髪が長いから、それを隠すためにタオルで覆っているのだろうか。――だが、なぜ隠す必要があるのか。一般人の参禅なのだ。髪が長くても別に問題はないのだ。ひょっとするとあの美少年は、女性ではないのか。女性であることを隠すためにタオルで頭を覆い、そして一言もしゃべらないのではないだろうか。たとしても、なぜ女性であることを隠す必要があるのか。禅寺には普通に女性の参禅者もいるだろう。あるいはこの寺は、女性の参禅を禁じていて、そのタブーがあるために頭を隠し言葉を発しないのだろうか。今でも女人禁制の山があったりするわけだから、有り得る話ではあるが、そこまでしてこの本堂もない薄気味の悪い山寺に若い女性が一人で来る必要があるのか。それに何より、私を見るあの目付きだけは、ただごとではない。やはり私に対して何か恨みがあるような気がする。今、私がこの寺を退散すれば、何事もなく終わるだろう。しかし私は、確かめたかった。美少年の正体を知りたかった。そして、あの板扉の中、和尚の言う浄土というのを、この目で見届けたかった。つまり退散するのはそのあとでもいいだろう、と私は考えたのだ。

夜の九時頃だろうか、時計がないからよく分からないのだが、例によって和尚が私の部屋の入り口に来て、「浄土へ行ってまいります」と言った。このとき私は、思い切って自分も連れて行ってくださいと言おうとしたが、やめた。なぜなら、こう毎回、わざわざ私のところに来て、浄土へ行ってまいります、と言うのは私にあとをつけさすためではないかと考えたからだ。それに私が和尚と一緒に行けば、あの美少年が行かない恐れがあり、やはり私は前から決めていたように、二人のあとをつけることにした。チャンスというものは、そう多くはない。だから私は今夜、それを実行することにした。

和尚は定位置で、美少年が来るのを待っていた。案の定、美少年が二階から降りて来て、和尚の方に向かって歩いたが、このとき美少年は、いつものカンテラではなく懐中電灯を手に持っていた。それはカンテラが重かったせいなのか、それとも和尚のカンテラだけで十分だと思ったの分からないが、和尚のそばへ行くと電灯の明かりを消した。電池の消耗を防ぐためだったのだろう。確かに和尚のカンテラだけで、十分に辺りを照らしていた。

私は二人が盆地の方へ向かってから、ちょっと間を置いてそのあとを追うことにした。

外は満月で、かなり明るかった。それでも懐中電灯をつけないわけにはいかず、また、あまり接近すると二人に気づかれてしまう恐れがあったからだ。もっとも、二人の考えが私にあとをつけさすのが目的であれば、気づかないふりをするのだろうが。

いずれにしても、和尚の持っているカンテラの明かりは、遠くからでもよく分かった。二人は間違いなくあの板塀、青年僧が言った和尚の隠れ家、和尚の言う浄土、すなわち極楽浄土へ入ろうとしていた。

二人が板塀の中に姿を消すと、私は歩を速めて近づいた。

囲いの扉は開いていて、私は恐る恐る中をうかがった。

想像していた通り囲いの中は蓮池になっていた。蓮の青臭い匂いが漂っていた。非常に背の高い蓮で、大きな葉っぱの上に蓮の花が咲いていた。と言っても、夜中だから、つぼみのように閉じていた。朝になれば開くのだろう。月の光に照らされて、幻想的な光景だった。

どこかでポコッポコッと音がしていたが、それは大きな蓮の葉っぱが風でぶつかり合う音だった。池は広く人間の背丈ほどある蓮にみっしり全体を覆われていた。小柄な和尚や美少年の姿は見えなかった。

囲いの中央付近がほんのり明るくなっていた。そこに二人はいるのだろう。よく見ると、蓮池には七十センチほどの幅の板の通路ができていた。それがまっすぐ中央に向かって伸びていた。大きな蓮の葉っぱが、その上に覆い被さっていたので、私は最初気がつかなかったのだ。この板の通路を通れば、和尚のいる場所につくのだろう。しかし、そうすると蓮の葉っぱに触れないわけにもいかず、その音で、和尚に気づかれてしまう。どうしよう、と私は思案した。このまま引き下がろうか、それとも思い切って、中に入ってみようかと。

私はふと夜空を仰いだ。まんまるい月が中天にかかっていた。この月に私は励まされた。もしもこのとき月が雲に隠れていたら、私の心も塞いで、大胆な気持ちにはならなかったかもしれない。

私は身をかがめ、頭の上で交差している蓮の葉っぱを避けるようにして、板の通路を前進した。

中央付近に近づくと、明かりが四方を照らしていた。さらに近づくと、六畳くらいの空間が、そこにあった。屋根も何もない舞台といった感じで、そこに和尚と美少年が並んであぐらをかいていた。座禅のつもりなのだろうが、それほどきっちりした姿勢ではなかった。

蚊取り線香の煙が辺りに立ち込めていた。隅に置いてあるカンテラの明かりで、それを見ることができた。

私は注意して近づいたけれども、和尚には感づかれた。

「そこにいる君、中に入りなさい」と言われた。

私は恐る恐る舞台に入った。和尚も美少年も目を開けて私を見ていた。二人は私が来ることを予想していたのか、通路とは向き合うように座っていた。だから私は二人に呼び出されたような形となった。

私は、「ここで何をしていますのですか？」と聞いた。

「まあ、そこに座りなさい」と和尚は言った。

で私は、その場に座った。蓮池の真ん中であぐらをかくというのも、不思議な感覚だった。和尚がこの蓮池を浄土と言うのも、何となく分かるような気がした。

そのとき私は、美少年の前に位牌があることに気がついた。真新しい位牌だった。

美少年は、やはり射るような目で私を見ていた。目に涙を浮かべていた。

私はその位牌が誰なのか気になった。が、尋ねることはしなかった。あの自殺したギター弾きなのだろう、とうすうす感づいていたからだ。よく見れば、美少年はどことなくあのギター弾きに似た顔立ちをしていた。兄弟なのだろうか。兄弟だとしても、なぜここに来たのか。なぜわざわざ位牌を持って来たのか。私を追ってこの寺に来たとしたら、その目的は何なのか。様々な思いが去来した。

ひょっとすると、これは罠かもしれない。……今までの経緯は、すべて私をこの山寺のこの蓮池に誘き出すためのものではなかったのか、そんな思いが私を捉えた。

仮にそうだとすると、では私をここに誘き出して、どうしようというのだ。

美少年の私を見る目つきは、恨み以外にない。だとすれば復讐なのだろうか。私を酷い目にあわすつもりなのだろうか。ここは山の中の盆地で、しかも囲いの中だ。声を張り上げても誰にも聞こえはしない。殺人をするにはもってこいの場所だ。

私はプロパン屋の話思い出した。和尚には男色の気があって、今までに何人もの若者が行方不明になっている。その場所は、やはりここではないのか。蓮の生育が異様に遅いのは、若者たちの命を吸収したからではないのか。

そこらへんを掘れば、若者たちの骨がザックザックと出てきそうな気がして、私は思わず身震いをした。恐怖が私を襲った。その恐怖をごまかすために、私は和尚に言った。

「ここが和尚の言われる浄土ですか？」

和尚は穏やかな顔で、「さよう、ここが浄土です。汚れのない空間です」と言った。

私はその穏やかな顔を見て、安心を得た。これから何かをしようというような顔ではないからだ。仮に和尚たちが私に襲いかかったとしても、私は通路側にいるわけだし、逃げる自信はあった。ただ蓮の大きな葉っぱが私の邪魔をするだろうとは容易に想像がついた。でも、体力なら私の方が勝っている。子供のような和尚は問題なく、美少年もまるで女性のように華奢だから、なんとでもなるだろう。私はその場に留まった。

まるで夢の中にいるような、頼りない精神状態だった。

ふと、美少年が位牌をこちら側に向けた。戒名が書かれていた。私はそれを見て、やはりあのギター弾きの位牌に間違いのないと思った。好弦信士と書かれていたからだ。

「祈れ！」腹の底から絞り出すような声だった。私は、心が震えた。と同時に私は、その声に聞き覚えがあった。あの電話に出た若い女性の声だとすぐに気がついた。

「あなたは！」と私は言った「あの電話のときの方ですね」

美少年は頷いた。いや、少女と言おう。

少女は言った。

「私はあなたに復讐をするためにここに来た」

やはり、と私は思った。

「復讐ですか。それはなぜですか？」と私は努めて冷静に聞いた。

「とぼけないでください。あなたは私の兄を殺したのです」

言いがかりだと私は思った。しかし、それを否定する言葉が出てこないのだ。

少女は続けて、

「あなたは私たちの夢を断ち切ったのです。兄妹で、ギターの演奏旅行をする、世界中を旅する、その夢を奪ったのです」

と涙声で言った。

私はやはり何も言えず、和尚の顔を見た。このとき和尚は眠っているかのように目を閉じていた。

私は二人が何か武器を持っているのではないかと、周りを見渡した。が、何もなかった。素手で体格に勝る私にどうしようと言うのだろう。私は恐怖心も消えて、逃げる気も起きなかった。しかし、それも束の間、ふとあの青年僧がここにやってくるのではないかと不安になった。あの青年僧は私より体格がいい。それにプロパン屋から、暴力団員を撲殺した話を聞いているのだ。蓮の葉っぱが風に揺れてボコッと音をたてるたびに、私は怯えた。うしろの通路を振り返って、あの青年僧がやって来ていないだろうか確かめた。

少女は再び、「兄のために祈りなさい」と言った。

自殺した彼のために祈れと言うのだ。私はどう祈ればいいのか分からなかった。謝れと言われれば、あのとき丁寧に彼に説明しなかったことを詫びればいい。それは容易いことだ。しかし、少女から復讐を受けるほどのものだろうか、と私は疑問に思った。少女はもっと他に理由があって、このようなことをしているのではないだろうか。

私は再び少女の目を見た。あの人を射るような目が、いつの間にか何かを懇願するような目になっていることに私は気がついた。その懇願しているものが何なのか、もちろん私には分からない。が私は、それを引き受けてみようと思った。なぜなら、この少女は、とても大きな苦悩を持ってここに来たのだ。でなければ、誰がこんな山の中に一人で来るだろうか。その苦悩を少しでも和らげてあげたいと、そう私は思ったのだ。

で私は正座をし、手をついて位牌に対して深々と頭を下げた。

和尚が突然、般若心経を唱え始めた。それは自殺した彼の供養のためなのか、それとも私と少女との決着をつけさせるためなのか、私には分からないが、その読経が妙に心地良かった。

少女は涙を流していた。その涙のわけは何なのだろう、と私は考えた。兄が自殺して、少女はきっと辛い思いをしたに違いない。

少女は私が兄を殺したと言った。兄が自殺した原因が私にあると思っているのだ。それは工場長も同じだ。工場長は友人の子供を自分の職場で怪我をさせたことを、ひどく後悔していた。友人に謝罪するとき、きっと私が全部悪いように言ったのだろう。それは自分の責任を軽くするためだ。つまり責任転嫁だ。

そのとき、少女が立ち上がった。私に向かって歩いて来た、と思ったら、そうではなかった。少女は位牌と懐中電灯を持って、私の横をすり抜けて帰って行ったのだ。声を出して泣いているようだった。

涙で前が見えるのだろうか私には心配になった。

私は彼女のあとを追いたかった。が、私の性格がそれを拒んだ。照れ臭いのだ。それで、その場に留まって、和尚の読経を聞いていた。和尚は知っているかぎりのお経を唱えているようだった。

ふと私は空を見上げた。月が煌々と照って、蓮の花が風に揺れて、大きな葉っぱがボコッボコッとあちらこちらで音をたてていた。

どこかで山犬が吠えていたが、それは仲間に知らせる遠吠えであった。山犬は、狼のように集団で狩りをするという。

やはり私は、遠い知らない国へ来たような妙に淋しい心もとない気持ちにふとなった。

## 22

翌日、私は少女のことが気になって仕方なかった。昨夜の少女の精神状態は危惧に値するものであった。しかし、私は二階に上がる勇気はなかった。

午前中、私は畑に出たが、昼からは寺にいて、少女のことばかり考えていた。

今夜、再び少女が和尚とあの蓮池へ行くのなら、私もそれについて行こうと決めていた。が、夜になり、いつもの時間帯に和尚は私の部屋に来なかった。浄土へ行ってまいります、と言う和尚が、いくら待っても来ないのだ。雨の日以外は常に来ていたのに、どうしたのだろう。

今夜も丸い月が出ているはずなのだが。

気になった私は部屋を出て、和尚の小屋を見た。真っ暗だった。多分一つしかないカンテラだったのだろう。そのカンテラを持って和尚はあそこへ行ったに違いない。

私もあの蓮池へ行ってみることにした。また少女に会えるような気がした。というか、それを願った。

和尚はいた。ステージの真ん中で座禅をしていた。目を閉じていた。私が来たことに気づかない様子だったが、それよりも、私はあの少女がいないことにがっかりした。そして急に不安になった。昨夜、あの少女はあれから無事、寺に戻ったのだろうか心配になった。というのも、あのとき、山犬が吠えていたのだ。その山犬に襲われたのではないだろうか。

私は今、目を閉じて座禅をしている和尚に声をかけるのは忍びなかったが、聞かないではいられなかった。

「和尚！」と私は腰を屈めて言った。

和尚は目を開けた。そして黙って私の顔を見上げた。

「昨夜の少女は、今日は来ないのですか？」

すると和尚は軽く頷いて、「帰られました。今日の午前中に……」

と言った。

帰った——その言葉に、私は再びがっかりした。しかし、最悪山犬に襲われたわけではなかったから、その点は安心した。

午前中なら、私が畑で草刈などをしていた頃だ。その隙に帰ったのだろう。私は急に力が抜けて、ガクッとステージに膝をついた。彼女に話したいことが一杯あったのだ。もっとも、それを言う勇気は多分なかっただろうが。

それにしても、私には何か釈然としないものがあった。彼女は、なぜあのとき泣きながら帰ったのだろうか。また彼女の目的は、いったい何だったのだろうか。彼女は、私に祈れと言ったのだ。だから私は、兄の位牌に対して頭を下げた。なのに彼女は逃げるよう去って行った。私に対する復讐はそれで終わったというのだろうか。

私は昨夜のことを和尚に聞きたいと思った。和尚はすべてを知っているように私には思われた。しかし私は、それをしなかった。というのは、あの可憐な少女のことで、この底の知れない胡散臭い和尚を介入したくない気持ちがあったのだ。胡散臭い。確かに和尚は胡散臭い。人が来ない山奥に蓮池を造り、それを浄土と言う。こんなけったいで不気味な和尚が他にいるだろうか。酒色に溺れる和尚はいても。

昨夜のことを述べれば、和尚はあれから大の字になって寝そべり、長いことそうしていたようだった。私も和尚にならって大の字になり、そして一時間ほどして寺に戻ったのだが、今夜もきっとそのように和尚はするのだろう。ここは和尚にとっては極楽浄土なのだ。なぜなら、私は大の字になって寝そべっている和尚が、とても幸せそうに見えたのだ。

## 23

翌日、私はこの寺を去ることにした。青年僧が、「なんだ、もう帰るのか。もっといたらいいじゃないか」と言った。畑仕事や風呂の水汲みで私は重宝したのだろう。が、私の決心は変わらなかった。一つの区切りがついたのだ。この寺に来た理由は、あの忌まわしい事件を忘れるためであり、新しい人生をスタートさせるためだ。自殺した若者の妹がこの寺を去ったことにより、私もここにいる意味がなくなったように感じたのだ。

私は和尚のいる小屋を訪ねた。和尚は留守だった。青年僧に聞くと、和尚は朝からどこかへ出かけているらしい。残念だった。私は一言、感謝の気持ちを述べて寺を去りたかったのだ。

いつ和尚が戻るのか、また明日和尚がいるという保証もないので、私は昼飯を食べたあと、すぐに寺を立つことにした。

私は日記をつけていたノートに感謝の気持ちを認め、そのページを破って青年僧に手渡した。

「和尚が戻って来たら、これを渡してください」

青年僧は、黙って頷いた。この青年僧は、自分以外のことに興味がないようで、おそらく私のことも、名前を聞く必要もない単なる参禅者に過ぎないと思っているのだろう。街のどこかですれ違ってもきっと覚えていないに違いない。それは、むしろ私にはありがたかった。この寺で過ごした貴重な時間は、私だけのものにしたかったから。誰にも覚えていてほしくない。しかし、あの少女は別だ。あの少女だけは、私のことを永遠に覚えていてほしい。そして二人だけの秘密にしたい。

青年僧は、私に腕時計を返してくれた。そして、トマトでもキュウリでも、好きなだけ持っていけ、と言った。

## 24

アパートに戻った私は、やはり無聊に過ごしていた。夏の暑さはこれからさらに増していくだろう。そんなある日、私は郵便受けに一通の封書が入っているのに気がついた。おかしなことに切手が貼られていないのだ。つまり誰かが直接私の郵便受けに投げ入れたのだ。差出人の名前も書いていない。

私は部屋の中で、その封書を開け、中の手紙を読んだ。

謹んでお手紙差し上げます。と、柔らかい字で書いてあった。すぐにあの少女が書いたものだと分かった。私はうれしくなり、目を皿のようにして読んだ。

早速ですが、山寺での件で、私はあなた様にお詫びを申しあげたいと思います。あのとき私が取った行動は大変ぶしつけで、あなた様に何と言って謝ればいいのか分らないくらいです。と言いますのは、私の兄が自殺したのは、あなた様のせいではなく、私のせいだからです。私が兄にひどいことを言ったことで、兄は悲観して自殺したのです。その言葉は、とてもここでは語れませんが、私は兄の誇りを傷つけたのです。兄はギターの演奏を、何よりも誇りにしていました。それを私は無残にも傷つけてしまったのです。つい口がすべったのです。私はそれまで、兄に逆らったことも悪口を言ったこともありませんでした。だから、兄は余計ショックだったのでしょう。そのときの私は、兄と一緒にギターの演奏活動をする夢が立ち消えたことで、やけになっていたのです。

兄が自殺したとき、私は自分のせいで兄が自殺したことを悔やみました。しかし、私は卑怯なことに、そのせいを誰か他人にさせたかったのです。でなければ、あのときの私の不安定な精神状態は、とても耐えられなかったのです。何度も言いますが、兄が自殺したのはあなた様のせいではありません。そして兄が右手の指を失くしたのも、あなた様が説明を怠ったからではありません。兄の不注意だったのです。工場長から話を伺ったとき、工場長はしきりとあなた様のお名前を出して、自分は関係ないというような態度を取りました。私は兄が時々ぼうっとする癖があることを知っていましたから、きっとそういう状態だったのだろうと推測しました。でありながら私はあなた様を恨んだのです。自分でも、なぜあんなにあなた様のことを恨んだのか分かりません。しかし今なら分かります。自分をごまかすためだったのです。私はそれを態度に示さなければ、気が済まなかったのです。工場長は私の父の友人で、頻繁に家に遊ぶに来ていました。あの山寺のことも父との会話でよく登場しました。じつは私たち家族は一度、あのお寺で過ごしたことがあるのです。夏休みに。ですから和尚とも知り合いです。それで私は工場長に頼み、あの山寺であなた様を懲らしめることを計画したのです。というか、私はあなた様に、兄の冥福を祈らせることによって、あなた様が兄に謝罪している形を作りたかったのです。和尚は賢い方です。事の真相を悟っていたようですが、私に協力してくれました。私の心がそれによって慰められるのなら、そうしようと思ったのでしょう。あの蓮池のことも、和尚の案でした。私は卑怯な人間です。そうやってあなた様に罪を転嫁させたのです。しかし、私はあの蓮池で、あなた様の顔を見たとき、ふと兄の顔を思い浮かべました。なんで私はこんなことをしているのだろう。兄がどこかで私の姿を見ているような気がしました。そう思うと、私は急に恥ずかしくなり、その場にいられなくなったのです。泣きながらお寺に戻ったのです。

翌朝、私はあなた様にお詫びする勇気もなく、立ち去りました。しかし、家に戻ってからも、あなた様にした卑劣な行為を忘れることはできませんでした。あなた様に謝罪しなければ気が済まなくなったのです。それで、こうしてお手紙だけでもと差し上げた次第です。どうか年端もいかない少女のいたずらとお許し下さい。私は今後、事の真実を真摯に受け止めていくつもりです。

それではあなた様の御健勝と御多幸をお祈りして、ここに筆を置きます。かしこ。

私はこの手紙を読んで、一服の清涼剤を得た。今まで、心の中でもやもやしていたものが、いっぺんに晴れたのだ。こちらこそ彼女に感謝しなければならない。

私はあの蓮池は、やはり極楽浄土だったのだと思う。和尚はあの山の中の盆地に、わざわざ囲いを造って蓮池を拵えた。それは俗界と区別するためだ。和尚があの蓮池を造った目的とは何なのか、と私は改めて考える。単なる隠れ家ではない。和尚はいつも、あの蓮池のステージで大の字になり、昼であれば青空を、雲があれば雲を、夜になれば星や月を眺め、そうやって瞑想に耽っているのだろう。それは逸楽である。そしてそれが、あの蓮池を造った目的ではないのかと。

私はあの浄土で得た貴重な体験を忘れたくはない。不思議な感覚だった。あの少女がステージを去ったあと、私は心の中が空白だった。何も考えることができなかった。

私は和尚のように寝そべって月を仰いだのだ。そのとき、非思量低のまさに底にいるような感じがした。非思量なのだ。何も考える必要はないのだ。幸福も不幸もここには存在しない。和尚は、ひょっとすると自分の過去の過ちを悔いるために、ここに浄土を拵えたのではないだろうか、とあとになって私は思ったが、確かにあの蓮池には、すべてのものを浄化させる何かがあるような気がした。その証拠に、あの少女の顔が急に柔和になったではないか。それはまさに浄化の現れなのだ。和尚はきっとそのことを知っていて、あの浄土を選んだに違いない。

私は、またいつかあのお寺に行きたいと思う。そうして、和尚のようにあの蓮池のステージで大の字になって空を仰いでみたいと思う。しかしそれは、私の人生で生きるのが困難になったときのことだ。

了